
この胸で眠れ (RIKU・6)

北川ライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この胸で眠れ（RIKU・6）

【Nコード】

N4427V

【作者名】

北川ライム

【あらすじ】

自分の中に入り込んで来た、正体のわからない黒い影に怯え、リクの心身は次第に衰弱してゆく。

やっと帰ってきた玉城と入れ替わるように、今度は長谷川がリクの傍を離れることになった。

リクを気遣いつつも、身を切られる思いで旅立つ長谷川。

使命感から、玉城は必死でリクの力になろうとするのだが、リクはそれを、ある理由から拒絶する。

リクの真意が理解できず、腹を立て、ついに玉城はリクに背を向け

るのだが・・・。

自分の存在意義を見いだせなくなったリクは、見えない力に取り込まれ、闇に堕ちてゆく。

携帯の電源を切るように、二人の救いの手を断ち切ったリクの前に現れたのは、いったい何だったのか。

前回の『RIKUS 天使の来ない夜』の続編の形をとる、「RIKU」第6弾。

全29話で、お届けいたします。

第1話 受診

処置室の、程良い室温と湿度が心地よかった。

時折小さくカチャカチャと金属の触れあう音がする以外は、何も聞こえない。

重くなる瞼に抗って、目の前を動く男の顔をぼんやりと目で追うと、その視線に気付いたのか、男がリクに顔を近づけてきた。

「気持ちいい？」

内科医は優しく笑って、ベッドに横たわるリクにそう訊いた。

「君のはね、バカなダイエットし過ぎて倒れた女の子並の血液データだよ。オールレッド。見る？」

荻原おぎわらという30歳半ばのその医師は、リクの左腕の点滴の針を確認しながら、軽い調子で付け加えた。

リクは笑って首を横に振る。

「でも、この診療所に来てくれて良かったよ。ひどい脱水症状まで起こしてるから、このままじゃ明日の朝は目覚めなかったかもしれないよ」

リクが返事に困っていると、薄いカーテンの向こうで聞いていたら、しい看護師が、声だけで「先生！」と、たしなめた。

さすがに不謹慎だと感じたらしい荻原医師は、端正な顔を少し歪ませ、神妙な顔をして「ごめんね」と言った。

北欧の血が混ざっていきそうな大きな凛々しい鼻と、がっしりした顎。唇は薄いが独特の色気がある口元は、医師と言うよりも舞台役者という感じだった。

スポーツ選手のように太い首。体つきも、白衣の上からでも逞しさを感じられる。

「気にしないでください」

リクは薬のせい、いつになくフワフワした体をベッドに横たえながら、透明な点滴のパックを見つめた。
確かに医師の言う通りかもしれない。

そろそろ体が限界に来ていることは、リクにも分かっていた。

「知ってる？ 本当は点滴で十分な栄養なんて取れないんだよ。こんなただの生理食塩水とブドウ糖だ。生きたいと思うなら、口から栄養を取らないとね。辛くても」

時折何かの端末に打ち込みをしながら独り言のようにそう言つと、荻原は再びリクを真上から覗き込んだ。

そして、開いたシャツから覗くリクの鎖骨の中程に、中指をトンと置いた。

「言うことを聞かないと、次はこの中心静脈から特太の針刺して高カロリー輸液することになるよ。いい？」

「・・・それは、やだな」

リクが困ったように小さく笑つと、荻原はやつと満足したらしく、カルテを書くために隣の診察室に戻っていった。

別の処置室では、老人に優しく話しかける看護師の声が聞こえる。
そんな声も、微かな消毒液の匂いも、すべて心地よかった。

瞼が重い。睡魔が泥のようにのし掛かってくる。リクは眠りを振り払うように激しく首を振った。

手にギュツと力を入れてみる。眠りたくない。

こんな場所で眠ると、自分がどうなってしまうのか不安で、堪らなく恐ろしかった。

その反面、このまま睡魔に任せて穏やかに眠れるのならば、もう目覚めなくてもいいとさえ思う。

「力を入れたらダメだよ。液が入って行かないから」

いつの間に戻って来ていたのか、荻原がドアの横に立ち、呆れ顔で

こちらを見ていた。

「・・・すみません」

「君・・・岬くん」

「はい」

「君はね、多分、受診する科を間違えたよ」

リクは黙ってそのがつしりとした医師を見つめた。また何かの冗談を言ってるようには見えなかった。

「君の摂食障害は普通の内科では治せない。君を救えるとしたら心療内科なのかもしれない。何か人に言えない悩みを抱えてないかい？」

リクは、自分に静かに話しかけてくる医師を、無言で見つめた。何を言うべきなのか、分からなかった。

ただ、自分を救えるのがそんな名前の内科でないことは分かる。

「いえ、・・・僕は何も」

「診察時間外に電話しておいで」

「え？」

リクがまだ少しトロンとした気だるそうな瞳を向けると、荻原は穏やかに言った。

「私は以前、総合病院の心療内科にいたんだ。話くらい聞いてあげられるかもしれない。君が望むなら、他の心療内科を紹介してあげてもいい」

「・・・」

「まあ、どちらにしても、またここに治療に来ること。まずは内科的治療をしよう。いいね。またぶっ倒れなくなったら必ず来なさい」

穏やかだが、逆らえない威圧感のある口調だった。

リクは取りあえず、治療に通う事には「はい」と答えた。

とにかく、一人で居る時にまた倒れて意識を失うことだけは避けたかった。

自分の意識が途切れる時間。

それが今のリクには、一番怖かった。

第2話 ベッドルームの闇

「リク、いるのか？」

2カ月ぶりに訪れたリクの家の玄関ドアは鍵が掛かっていなかった。外出時も鍵をかけない事が多いリクのことだ。居るのかどうかは、まるで分からない。

長期取材のインドから先程戻ってきたばかりの玉城は、木製のドアを開け、大声で友人の名を呼んでみた。

けれどログハウスの調の吹き抜けの部屋はしんと静まりかえり、人のいる気配はなかった。

玉城はため息をつき、土産の入った袋を棺材の大きなテーブルにトーンと置くと、変わり者の友人の部屋を見渡した。

壁際の布製のソファの上に、リクの携帯がころがっている。

手に取ってみると、思った通り、充電もされていない。

「・・・ムカツク」

いつものように頭に来て悪態を吐き出そうとした玉城だったが、彼の目に止まった物がそれを止めた。

ソファの横の、円筒の屑籠だ。

その中には白い包帯が、艶めかしい蛇のようにとぐろを巻いていた。その白の上には鮮やかな赤。

まだ完全に変色していない血が、点々と包帯を染めている。

「リク？」

居ないと分かっているのに、玉城はもう一度リクの名を呼び、部屋をぐるりと見渡した。

急に胸がザワザワと騒ぎ、不安が呼吸を乱した。

10日ほど前に電話した時は元気だと笑っていたはずだ。

怪我でもしたのだろうか。

玉城は落ち着かなくなり、リクのベッドがあるロフトのはしごを登った。

そこで再び玉城は息を呑んだ。

ベッドの下には同じように血で汚れたタオルが丸めてあり、そしてベッドヘッドには幾重にも細めのロープが巻き付けてあった。

明らかに、何かを縛っていた形跡がある。

生成の布製ロープの端にも赤黒いものが付着し、染み込んでいた。血だ。でも、なぜ？

途端にゾクリとする寒気を背中に感じ、玉城は身震いした。

振り返るが、もちろんそこには誰もいない。

独り暮らしにはほんの少し広すぎる、簡素で清潔なりビングがあるだけだ。

玉城は手すりを握り、ロフトからゆっくりリクの部屋を見渡してみた。

リクが毎朝一人で目覚める空間は、ヒタヒタとした胸の悪くなる『何か』で満たされていた。

精神を浸食してくる『何か』だ。

数ヶ月前、玉城を助けるために自ら霊力を強める行動をとってしまったリク。

彼は長い年月をかけて封印した《扉》を開けてしまった。

『困ったことがあれば、今度は俺が助ける！』と、偉そうに言うておきながら、自分は彼に何をしてやったと言うのだろう。

リクは何かに追い込まれても、玉城や長谷川に助けを求めるタイプではない。

そのくせ自分の身の守り方を知らない。

承知していたはずではないか！

玉城は滑るようにハシゴを降りると、キッチンやバスルームを覗いた。

そこに、倒れていたらどうしよう・・・。

一瞬過ぎたそんな想像が、玉城の心臓を凍らせた。

けれど、開いたドアの中はどこも空っぽで、そのことに心底ホツとしながら、今度は玄関ドアに向かった。

“裏山だ。きつと裏山にいるんだ。そうだろ？　そこにいてくれ！”

祈るような思いでドアノブに手を伸ばした瞬間だった。

いきなりそれは勝手にスイと開き、初秋の眩しい光が玉城の目を眩ませた。

立ちすくんでいる玉城に、光の中のシルエットは一瞬驚いてかたまり、そしてすぐに嬉しそうに弾んだ声で言った。

「玉ちゃん！」

第3話 ツオモリリの石

光の中、リクが笑顔で立っていた。

玉城は全身の力が抜けるような安堵を覚え、一つ大きく息を吐いた。
「どこ行つてたんだよ。鍵開けっ放しで！」

「勝手に人ん家に上がり込んで、それはないよ」

リクは可笑しそうに笑うと、ゆっくりとリビングに上がり、玉城と向かい合った。

「お帰り」

「・・・うん」

けれど玉城は笑い返せなかった。

たった2カ月足らずで、リクは更に痩せてしまっていた。

あまり外出していないのだろうか。

元々日焼けとは無縁ではあったが、夏を越したと思えないほどその肌は白かった。

けれどやつれたという感じではなく、ほっそり引き締まった頬や顎のラインが、リクの整った造形を更に妖しげに美しく引き立たせている。

いつもの刺々しさが感じられず、玉城は何となく別人と向き合っているような錯覚に捕らわれながら、目の前の青年の瞳を見つめた。

「リク、何かあったのか？」

「何かって？」

「だから、体調悪いとか怪我したとか・・・。“あっちの連中”が悪さしてくるとか」

何となくベッドルームを覗いたことを言い出しにくく、玉城は遠回しに訊いてみた。

「ああ。そうだな、体調はあんまり良くない」

「どうした？ あいつらか？」

シオルダーバッグを椅子の背に掛けたリクに玉城が詰め寄ると、再び可笑しそうにリクは笑った。

「あいつら」って誰？ 僕は悪の秘密組織にでも追いかけられてるのか？ 大丈夫だよ、ちよつと最近食欲無いだけ。時々目眩がするから、さつき医者に行ってきた。ただの貧血だってさ」

何でもないようにサラリと言つてのけたリクは、視線をテーブルの上のエキゾチックな柄の布袋に移した。

「これ何？ お土産？」

「あ、・・・ああ。帰る前インドで何か買おうと思つただけだよ。あまりいいの無くて」

土産の話よりも、訊きたいことが沢山ある。

あの包帯は？ ベッドルームの血は？ あのロープは？
けれど明らかに話題を変えたがつているリクの口調は、玉城の質問のタイミングを奪った。

「まさかまた、お守りじゃないよね？」

リクが袋を覗き込みながらイタズラっぽく言う。

玉城はその横顔を見ながら、リクの本心を探った。何かを隠しているにしては、とても穏やかだ。

けれど何か、いつもと感じが違う。空気が違う。

漠然としたそんな『何か』が、玉城を再び不安にさせた。

「残念ながら、木彫りのでっかい呪い人形みたいなものしか無くてさ。そんなの持って帰ったらきつと怒られると思つて諦めたよ。中身はワインとツオモリリ湖の石」

「ツオモリリ湖？」

「ああ、すごいぞ。身震いするほど神秘的な湖なんだ。人の手あかのついてない神の領域だ。広大すぎて、

一人じゃちよつと寂しい場所なんだけど。リクを連れて行ってさ、絵を描かせたら凄いの描くんじゃないかって思ったよ」

「僕？」

リクはそう言ったまま、少し黙り込んだ。

ぐるりと視線を天井あたりに巡らした後、再び玉城の顔に戻し、そのままじつと目を見つめてくる。

玉城はどつと全身が発汗した。

訳の分からない不安と緊張が、体中の血管から吹き出して来る感じがした。

こいつは、こんな目をしていただろうか。

「な、・・・なんとなく思っただけだよ」

けれどすぐその奇妙な気配は消えた。

「そんな時はさ、玉ちゃん。可愛い彼女を思い浮かべるんだよ」

いつもの少し意地悪なリクの笑みだ。

「悪かったな。どうせ可愛い彼女なんていないさ」

「それは残念」

リクはそんな軽口をたたきながら、袋からその“石”らしき物を取り出した。

無造作に汚れた薄紙にくるまれていて、どう見てもお土産には見えない。

リクはガサガサとそれをめくり、手のひらにコロンと乗せた。

ゴツゴツとした、何の変哲もない白っぽい石だ。

「これって、拾って来たの？」

「そうだよ。ただの石ころ。でも何か持って帰ってたんだ。記念に」

玉城がそう言う間、リクはじつとその石を目の高さまで持ち上げて見つめていた。

そのシャツの袖口から、チラリと白い物が覗いた。

包帯だと気づき、玉城の心臓がギュツと軋んだと同時にリクは呟いた。

「一緒に行こうか」

「え？」

何のことか分からずに玉城は聞き返した。

「いつか一緒に行こうよ、その湖に。僕も見たくなった」

「あ・・・あ。そうだな」

玉城はそう返すと、無理やり笑ってみせた。

人間を警戒し、避けて近づかなかった野生の鳥はここには居ない。けれど、身を寄せて来ながらも、その手傷には決して触らせようとしない。

一体その胸の内に何を隠しているのか、玉城は今すぐ問いたかった。かった。

だが思い返せば、それでいつも失敗してしまうのだ。

無理強いすれば、その口から出てくるのは、すべて嘘で固められる。

自分の方に手を差し出して来るまで待つしかないのだろうか・・・。
玉城はそんなことを思いめぐらしながら、異国の石を手の上で弄ぶ
青年を、ただ無言で見つめた。

第4話 不機嫌な編集長

「ええっ？ 俺の居ない間にそんなことがあったんですか？」

玉城は大東和出版のラウンジのソファから身を乗り出し、長谷川に言った。

興奮気味の玉城とは対照的に長谷川は、腕組みをしながら一人がけソファにもたれ掛かり、無然とした表情だ。

「そんな事もこんな事も、2カ月近く一本も電話してこないヤツに話せないでしょうが。まあ、『グルメディア』スタッフと楽しい楽しい旅行中のヤツには、そんなことどうでもいいんだろうけどね」
「やめてくださいよ、長谷川さん。慰安旅行も兼ねてましたけど8割がた取材だし、アジアのあの地域は連絡取りにくかったですから」

玉城はいつになく不機嫌な長谷川を懸命に宥めながら説明した。

長谷川から、『帰国したんならリクと一緒にこつち（大東和出版）までおいで』と電話が入ったのは、ちょうどリクの家にいる時だった。リクと話し合い、翌日の朝10時ごろラウンジに集合ということにした。

そして当日。

少し早めに来てしまった玉城に、長谷川は2週間前の秋山をめぐる騒動を話して聞かせたのだ。

「だけど、リクがそんなに他人に親身になるなんて、ちょっと意外だな」

「同じ事を言うね」

「え、誰と？」

「私と。私も言ったんだ。あんたが人の事を気にかけるなんてね、

って」

「え……。面と向かって言っただんですか？」

「悪い？」

「きついですよ」

「そうかな」

無自覚な長谷川に玉城はあきれかえり、その一方でジワジワと可笑しさがこみあげ、笑い出しそうになった。

この人は心底リクを愛し、大切に思ってる癖に、未だにそれに気付かない。

母性愛か何かだと思ってる。それ故の暴言だ。

けれど玉城にはその構図がなんとも愛らしくて堪らなかった。

彼女がいつ気付くのか。あるいは気付かないのか。

密かに玉城はそうやって見守ることに、ワクワクしていた。

「でもそれは、あんたのせいだよ、玉城」

「はい？」

ニタニタして聞いていた玉城は、何の話だったろうと訊き返した。

「あんたがリクを冷たい奴だって言っただから」

「は？」

「あいつは変わろうとしたんだ」

「え、そんな。俺、そんなこと言っただ覚えは……」

玉城は慌てて記憶を辿ったが、思い出せなかった。

「あんたの言っただけが堪えたのか、変わらなきゃって思っただけだよ、リクは。だから私は変わらなくていいって言っただけ」

長谷川の顔が少し険しく歪んだ。

「危険な目に遭うくらいなら、変わらなくていい」

玉城は長谷川の辛そうな表情を改めてじっと見つめた。

上背もあり筋肉質で、女性らしいとは言いが、キリリと整った目鼻立ちが男から見ても凛々しく、いつも頼りがいを感じた。

けれど今日の彼女はいつもと少し違う。
いつもの絶対的な安定感が無かった。

「何かありました？ 長谷川さん」

「あなたと入れ違いになるね」

「え？」

「転勤なんだ。明日からシンガポールさ」

「・・・え・・・！ 明日って、なんで？ なんでシンガポール！？」

玉城は思わず大声を出し、振り返った2、3人の社員の目に気付いて、慌てて声を落とした。

「なんで？ なんでこんな秋口に？ グリッドは？」

長谷川はようやく穏やかな表情になり、小さく息を吐いた。

「急に持ち上がった話なんだ。シンガポール印書館との合併話は」

「印書館？」

「中国の商務印書館の支店なんだけど、今は完全に独立体勢でね。」

少し経営が危ぶまれてるところに、うちが目をつけた。アジアにちよっかい掛けるつもりだよ。大東和は」

「それで、長谷川さんが？」

「うん。今はまだ調査と地盤作りだけだね。白羽の矢が立つちゃった。どうにも断れなくてね」

長谷川は寂しそうに笑った。

「でも・・・グリッドは？」

「グリッドの編集長には別の人が立つよ。辞令も上がった。もう、グリッドも発行部数が伸びて軌道に乗ったから大丈夫だと思う」

「あなたが軌道に乗せたのに！ あなたとリクが！」

「声がでかいよ。何泣いてんのさ」

「泣いてなんかいません」

玉城は目をこすり、鼻をすすった。

サラリーマンという物が、そんなものだとは分かっていたが、どうにも割り切れず、とてつもなく悔しく、悲しかった。

グリッドは長谷川が心血を注ぎ、リクと玉城が出会い、大きく関わり合った、言わば母体のような存在だった。
それなのに。

第5話 傷の訳

サラリーマンの不条理に納得できず、いつまでも不毛な不満を露わにしている玉城に対し、長谷川は淡々と言った。

「私の補佐に抜擢された多恵ちゃんも、最初あんたみたいにピスピス泣いてたんだけどね。さすがにあの子は切り替えが早いよ。一足早く向こうに飛んで、今頃は快適な住居探してる最中だと思うよ」

「多恵ちゃんもシンガポールに？」

「うん。あの子は強いね。私も頭を切り換えなくちゃ」

・・・違う。長谷川が切り替えられないのはリクのせいだ。

玉城には痛いほどそれが分かった。

待ち合わせ時間にもう15分も遅刻している、あの青年のせいなのだ。

「リクは知ってるんですか？ 長谷川さんのこと」

「知るわけないよ。電話も通じないしね。あいつ、電源を入れやしない。私からのコンタクトなんて、うざったくて望んでないんだろ」
「昨日ちゃんと言っておきました。連絡取れる状態にしておけて」
「ねえ、玉城。リク・・・どうしてた？ 少し痩せてたろ？」

長谷川の声が少し不安げに細くなった。

「ええ。食欲が無いって言ってました。ちゃんと医者には行ってるみたいですけど」

「へえー、そう。医者嫌いなのに、進歩だね」

「でも、・・・あの手首はちょっと気になりますね」

「手首？」

「ええ。聞いてます？ 左手首のこと」

玉城はぐつと身を乗り出した。

「あれは何の傷なんですか？ 自分で手当してるみたいでしたけど、

かなり出血があるようだし、部屋の様子も変だったし、・・・ちよつと気になるんです」

長谷川の表情が途端に険しくなった。

「リクは・・・あいつは何度訊いたって、ただの捻挫だって言った。・・・くそっ!!」

長谷川が吐き捨てるようにそう言って立ち上がったのと、ラウンジの入り口にリクが顔を見せたのは同時だった。

玉城は自分が余計な事に触れてしまったことに気が付いたが、もう遅かった。

「リク!」

カツカツと足音を響かせてリクの所まで歩いて行くと、長谷川はその右腕を強く掴み、廊下の方へ無理やり引っ張って行った。

「ちよつと、長谷川さん!」

玉城がそう叫んで慌てて追うが、長谷川は無言でリクを掴んだまま、どンドン廊下を突っ切って歩いていく。

「放せよ! 痛いってば」

ようやく声を上げたリクを、長谷川は廊下の突き当たりの壁に押しつけた。

光に満ちたラウンジとは対照的に、普段あまり使われていない資料室前のこの空間は窓もなく、青白い蛍光灯のせいで夜中のように感じられた。

リクが腹立たしげに長谷川の手を振りほどくと、長谷川は今度は素早くリクの左手をつかみ、白地のコットンシャツの袖を捲った。

ほっそりとしたその手首には、白い包帯が無造作に巻き付けられていた。

やっと追いついた玉城は長谷川の唐突な行動に少しばかり驚き、リ

クは自分の腕をつかんでいる長谷川を睨みつけ、声をあげた。

「何だよ！」

「この手首は捻挫じゃないよね。何で嘘をついた？」

一瞬驚いたように目を見開いたリクだったが、すぐに鋭い目つきで再び長谷川を睨んだ。

「何がだよ。たとえ捻挫じゃなかったとしても、なんで長谷川さんにそんなこと言われなきゃなんないんだよ」

「あんたに嘘を吐かれないんだよ」

「嘘だつて何だつて、関係ない。僕の体だし、どうだつていいだろ」

「あいにく、どうだつて良くないんだよ。あんたの事が心配で仕事に支障が出る！ 大迷惑だよ！」

長谷川はきっぱりと言い、そして続けた。

「明日付けで海外に転勤なんだ。しばらく帰って来れない。すつきりしないと、何も手に付かない性格なもんでね。もう、遠慮はしない事に決めたから」

「・・・海外に・・・転勤？」

リクは急に声のトーンを下げ、驚いた表情で長谷川を見、そしてその横の玉城を見た。

「本当なんだ」と言う代わりに玉城が小さく頷くと、リクはゆっくり視線を戻し、自分の左腕をまだ強く掴んでいる長谷川の手をじっと見た。

その目にはもはや先程までの刺々しい怒りは感じられなかった。ただ、はたから見て分かるほどの困惑と動揺が浮かんでいる。キュツと心臓を掴まれたような痛みを感じた玉城。

きつとリクの痛みだ。訳もなくそう確信し、玉城はようやく口を開いた。

「ごめんな。リクの家で血の付いた包帯を見たんだ。ベッドルームの血まみれのロープも見た。あれは・・・尋常じゃないよ。何かあるなら言って欲しい。俺はお前に何かあると全部自分のせいじゃないかって思ってしまうんだ。俺のせいで、あの力が強くなったから・・・」

「玉ちゃんのせいなんかじゃないよ」

リクは小さく呟き、そして長谷川の目をじっと見た。

その真っ直ぐな、胸をざわつかせるような眼差しに逆にたじろいだ長谷川が、思わず手を放した。

リクは開放された左手を軽く右手で撫でると、抑揚のない声で静かに話し始めた。

「夜・・・寝る前に、自分で自分の左手首をロープでベッドに縛りつけるんだ。この体が勝手な事をしないように。僕がやってるのは、ただそれだけだよ」

玉城が思わず口を開きかけたが、リクは遮るように続けた。

「でも、それに抵抗して体が暴れ出すんだ。僕の中に、僕以外の何かが居る。ロープや針金で固定しても、それを無理やり引き千切ろうとするんだ。」

この前、手に届くところに置いてあったナイフで、ロープと一緒に手首まで落とされそうになった。馬鹿みたいに見境ないんだ。あの時はさすがにやばいと思ったけど・・・でも、その抵抗する痛みで僕はいつも目覚める事ができる。

だから痛みを感じられるように、毎晩同じ場所をロープでくくりつける。自分じゃない自分に、体を支配されないように・・・怖いんだ。自分の手首を落としてまで、自由になろうとするバケモノが僕に中にいる。だから・・・死んだっていいから眠りたくなかった。自分じゃない“何か”になっってしまうのなら、死んだ方がいい」

リクは一気にそう喋ると、不安を押し殺して閉じこめたような目をして、長谷川をじっと見た。

「ぜんぶ話したよ。もう、隠してることなんか何も無い。・・・これでもいい?」

第6話 あふれ出す熱

リクは疲れたように冷たい壁にもたれると、ダラリと両腕を垂れ、目を伏せた。

さっきまでの棘々しさは、もう、そこには無かった。

「リク……」

そう声を漏らしたのは玉城だったが、つと前へ出てリクの肩をつかんだのは長谷川だった。

「ねえ、……それは何？ 何がリクの中に入り込もうとしてるの？ 何がそうさせるの」

長谷川の喉から出てきた声は自らも驚くほど細かった。玉城もその空気に逆らうように声を張り上げた。

「なあ、リク。それは『あいつら』のせいかな？ お前が扉を開けたから、悪霊みたいな何かが入り込んで来るのか？ この前、お前が殺された女に体を貸してやった時みたいに、何かに乗り移られたのか？」

リクは力なく笑った。

そして首を横に振る。

ふわりと柔らかい髪がゆれ、伏せられた青白い瞼にかかった。

否定の合図ではない。

《分らない》 そう言う代わりに首を振ったのだ。

長谷川も、その時になってようやくリクが限界に来ているのが分かった。

リクが、もうどうしようもなく自分の体に困惑し、疲れ切っている事に気付いたのだ。

「追い出しちまおうぜ、リク。霊媒師でもなんでも呼んでさ。悪霊

なんて追い払っちまおうぜ。な？」

玉城が吠えるように言った。

けれどたぶん、玉城自身、半分はそんなこと不可能だと思っているに違いないのだ。

そんなことが出来るなら、リクはとづくにやっている。

リクに出来ないことは、他のどんな霊能力者にも出来はしないと、以前長谷川に教えてくれたのは玉城だったのだから。

リクの霊力はそれほど並はずれている。リクに正体のわからない化け物が、そこらへんの霊媒師に見抜けるわけがないのだ。

リクが再び首を横に振った。

「でも、まだ抑え込むことができてるし……。何とかなるよ。大丈夫だと思う。だから……」

「何で一人で抱え込むの。気休めでも私たちに話してみようとかいう気は起きなかった？ 私や玉城は、そんなに役に立たない存在なのか？」

長谷川はリクの両肩に手を置いたまま、極力声を荒げずに言った。

この青年に向けるべき憤りではないのだ。それは分かっている。

けれど心の中は爆発しそうに熱を持って膨張していた。

怒りではない。

長谷川にも分からない、張り裂けそうな感情を押さえるだけで、頭も体も精いっぱいだった。

リクは長谷川を見つめ、一瞬フツと目を細めた。

力の入らない空虚な笑いだ。

「ごめんね。そんなんじゃないんだ。これは……。僕ひとりの問題だと思ったから。僕の中に原因があって、それはきっと自分で何とかしなきゃいけない事で……」

言い終わらないうちに、リクは長谷川の腕に抱き留められていた。リクよりも上背のある筋肉質な腕に、リクはすっかり包み込まれた。長谷川の感情の防波堤は、本人も思いもよらぬ刹那に、呆気なく崩れ去ってしまったのだ。

リクは驚いて一瞬体を硬直させたが、一番大声でも上げて騒ぎそうな玉城は、それを静観した。

玉城にも、長谷川の悔しさが痛いほど伝わってきたのだ。

一番守りたい人を守る方法が分からず、そして明日にはその人を置いて行ってしまうなければならない。

「大丈夫。あんたは他の何かに取り込まれたりしない。そんなことあり得ない。きっと大丈夫だよ。だから自分を傷つけるような事はもうやめなさい。きっと・・・きっと何か、いい方法が見つかるから」

リクの肩に顔をうずめながら、長谷川がぐくもった声で言った。

自分の手出し出来ない領域への憤りが、語尾を震わせる。

悔しくて腹立たしくて堪らなかった。

リクは観念したように長谷川の腕の中で全身の力を抜き、一つ息をつくと、呟いた。

「長谷川さん」

「ん？」

「遠くに行くの？」

「・・・ああ」

「さよなら」

「・・・馬鹿が。すぐ帰ってくる」

長谷川は更に腕に力を込め、リクのしなやかな体を包み込んだ。リクの背に回した手のひらが、薄いシャツ越しにザラリとした昔の

深い傷あとに触れたが、長谷川は無言でそれごと抱きしめた。
押し込めていた正体の分らない火のように熱い感情が、触れ合った肌の間で更に熱を帯び溢れ出した。

ただ静かに長谷川の感情の高ぶりを受け入れて、自分の腕の中でじっとしている青年が愛おしくて、守りたくて、堪らなかった。
自分の魂を、ここに置いて行きたくて仕方なかった。

「リク、電話するから。なるべく休みには帰るようにするから。玉城だっているしさ。あんたは一人じゃないんだよ。何かあったらいつだって電話しておいで。・・・海の向こうからだってすぐに飛んでくるから。だから・・・がんばって・・・頼むから」

リクは長谷川の優しい言葉に微笑み、返事の代わりに小さく頷いた。

第7話 優しい男

微かに鼻孔を刺激する消毒液の匂い。

心地よい温かさと、ふわりと軽くなる体。

少しばかりまどろんだあと、瞼の裏でスイと動いた人影を追うように、リクはゆっくり目を開けた。

薄いピンクのナース服を着た若い看護師がそれに気付き、少し頬を赤らめて「もうすぐ終わりますからね」と微笑みながらスライドドアの奥に消えた。

入れ違いに入ってきた荻原医師が、わざとナースの消えた方へ視線を送る仕草をしてみせる。

「眠ってる君を見に来たんだよ、彼女」

そう言つて笑いながら点滴の液を確認し、続けた。

「ここにいる二人のナースは、君が来るとソワソワし始める。まあ、気持ちは分かるけどね」

「・・・どうしてですか？」

「カンフル剤なんだよ」

荻原はリクの左側に立つと、その腕から点滴の針を抜いた。

針の痕を絆創膏で抑えながら荻原はじつとリクを見た。

「君は点滴の時必ず眠るね。まだちゃんと夜、眠れてないんじゃないのかな？」

医師の声はよく通るバリトンで、リクは霞のかかった頭でボンヤリそれを聞き、ゆっくり首を横に振った。

「いえ、大丈夫です」

「本当に？」

「・・・はい」

リクが抑揚のない声でそう言つと、荻原は少し顔を近づけてリクの

目を覗き込んだ。

「すぐに風邪をこじらす。一度熱を出したらなかなか下がらない。真夏は熱中症になりやすく、あまり外出できない。そして、その原因の一つになったものに、君は何らかのトラウマを抱えている。違う?」

医師は体を起こし、続けた。

「ごめんね。初診の時から気になってたんだ。君の背中 of 大きな傷跡とケロイド。最低限の処置しかされていないじゃないか。皮膚の移植手術も不完全だ。あれでは体温調節も難しいはずだよ。君のご両親は、君をちゃんと医者に通わせたのかな」

さすがに最後のは失礼な発言だったと思ったのか、医師は少し目を泳がせた。

リクは逆に、今まで傷の事を訊かなかった医師に好感を持ち、小さく首を横に振った。

「昔のことで、よく覚えてません。体の方も昔のように熱を出すことは少なくなりましたし、平気です」

「いったい、なんでこんな大怪我を? 訊いちゃいけなかった?」

「よく覚えてないんです」

「怪我の時の事とか覚えてないの? こんな大けがなのにな?」

「・・・ええ」

嘘は吐いていない。あの前後の記憶は随分と曖昧だった。

そして、事件に巻き込まれたことなど、医師に話すつもりは毛頭ない。

そんなことを思いながら、同時に、自分の処置にこんなに時間をとって大丈夫なのかと心配になった。

待合室には順番を待つ患者がまだ多く居たはずだ。

「そう。・・・じゃあ、この包帯とその傷跡は、関係ないのかな」
医師はリクの左手首の包帯をそっと触ってボソリと言った。
リクは頷く。

点滴のために晒した腕のその白は、嫌でも存在を主張している。気
になっていたのだろう。

「ええ。ただの捻挫ですから」

「じゃあ・・・自分でやったんじゃないんだね」

リクはようやく理解した。

ああ、この医師は、自分の摂食障害を心の病のせいだと思っている
のだ。

背中傷の原因がトラウマになり、食事も取れず、あげく自傷行為
に至ったのだと。

「大丈夫ですよ、先生。トラウマなんてありません。心の方は元気
ですから」

「そう？」

仕事熱心な元心療内科医は、読みが外れて幾分がっかりしたような
表情をしたが、反面、安心もしたようだ。

「自分は内科医だからね。内科医として君に出来ることはやってあ
げる。だけど、もっと何か別のことで相談があったらいつでもおい
で。時間外だって、休診日だって構わないから」

この医師は、心に不安を持つ患者全員にこんなボランティアをして
いるのだろうか。

そんなことを思いながらリクは、その風変わりな医師に取りあえず
礼を言い、その診療所をあとにした。

心の事で相談をする必要なんてない。

自分の身に起きているのは別の事なのだ。

「こら、そのアホタレ！ お前は学習能力ゼロなのか！ 馬鹿なのか！ 幼稚園児なのか！」

リクが自宅に帰りつくと、その玄関先には、両腕にスーパーの大袋を下げ、不機嫌この上ない様子で立っている男が居た。そう言えば携帯電話を持って行かなかった。

リクはそうボンヤリ思いながら、沸騰したヤカンのように熱くなっている、もう一人の優しい男を見つめた。

「何してんの？ 玉ちゃん」

第6話 苛立ち

「何してんのじゃねーよ！」

玉城はリクが鍵を開ける間我慢していた鬱憤を、リビングに上がると同時に爆発させた。

大きな櫛材のテーブルに食料品の入ったスーパーの袋をガサツと置き、すぐさまリクを睨みつけた。

「ケイタイ繋がらないし、直接行ってやろうと思ったたら居ないし。俺、40分玄関口で立ちんぼだ」

「今日は鍵、掛かってたろ？」

「なおい悪い！」

「・・・言うことが前と違う」

リクは洗面所で洗った手を拭きながら、呆れたように言った。

玉城はムスツとしながら、スーパーの袋からガサゴソと買ってきた惣菜や飲み物を取り出した。

リクは近づいてきて不思議そうにそれを眺める。

「何？ それ」

「外食に誘っても来ないだろ？ 長谷川さんが、お前メシ食ってないんじゃないかって心配してたから、いろいろ買ってきたんだ」

テーブルにはフライドチキンやサンドイッチやおにぎりやサラダ、手当たり次第買ってきた食品が並んだ。

「俺、料理とか出来ないから出来合いばっかだけとき。何か食えそつなもん、あるだろ？」

「僕は寝たきりの病人じゃないよ。買い物くらい自分でできる」

リクは少しばかり困惑した顔をした。

「手ぶらで帰って来てるじゃないか」

「病院に行っただけだから」

「じゃあ、腹減ってるだろ。食べ」

リクは、全くシンプルな思考回路を持つ玉城をじっと見つめ、溜息をついた。

「悪いけど、今はお腹空いてない」

「溜息をつくな。ムカツクなあ」

玉城はぐっとリクに顔を近づけた。

リクの少し色の薄い大きな瞳が反発するように玉城を見返してくる。親切心を素直に受け入れないのはいつもの事だが、今回ばかりはこり押ししたかった。

長谷川さんの事もある。

「病院行ったら、少しはマシなのか？」

玉城が声のトーンを落としたので、リクも表情を和らげた。押せば反発するが、引けば少し近寄って来るこの野生の鳥の扱い方を、玉城はようやく思い出した。

「うん、点滴してもらうと少しは楽になる。特になにも治療はしてないんだけど」

「でも、そんなんじゃダメだろ。食わなきゃ死ぬぞ？」

「うん、そうだね」

リクはようやく玉城を見て笑った。

“ なにが、そうだね、なんだよ ”

玉城はなにか歯痒いような、腹立たしいような不安を感じた。

「なあ、リク。それって・・・やっぱり、あれのせいだろ？」

「え？」

リクがキョトンとした目を向ける。

「その、あれだよ。強くなっちまった靈感。俺のせいで、強めちゃ

つたんだろ。封印解いて。だから、今までよりもひどいヤツがお前の中に入り込んだとか。・・・そんなんじゃないのか？」

「言つたろ？ そんなこと僕にも分からない。だけど玉ちゃんが気に病むことは少しも無いって」

リクはそう言つと、壁際の大きめの布製ソファに座り込んだ。

外出で疲れたのだろうか。顔色が蒼白だ。

玉城はソファ横の屑籠に何となく目を走らせたが、さすがにもう包帯は片付けられていた。

「夜、どんな感じなんだ？ 勝手に体が動き出すのかなのか？」

玉城は恐る恐る訊いてみた。

「始めの頃は気付かなかったんだ。朝、目が覚めた時、体が鉛のように重くつて。そのうち分かったんだ。自分が夜中、勝手に外に出て行つてることが」

「え・・・外にか？」

「らしいね。どこに行つたとかは分からないけど。もしかしたら遠出してるのかも」

「マジでか？」

玉城は身震いした。

「怖くなつて左手をベッドにくくりつけた。でも、器用に解いたり引きちぎつたり。運がいいときは痛みで目が覚めるんだけど。でも3日前は、朝起きたら僕はリビングに転がつて、左手が血だらけだった。痛みも感じない時があるんだ。絶対に外せないように鎖で縛ろうと思つたけど、今度こそ本当に手首を切り落とされそうな気がして、出来なかった」

淡々としやべるリクの言葉にうすら寒くなり、玉城は息を飲み込んだ。

胃の辺りがズンと重く、不快になる。

「何でなのか、分からないのか？」

「うん」

「そんなこと、あり得ないだろ、普通」

「そうだろうね。普通あり得ない。だから言っただけ。僕は普通じゃない。おかしいんだ」

リクは無表情に言った。

「嘘だ。わかってんだろ？リクには。自分の手首斬りつけてまでして動き出そうとするのが、彼奴らの仕業じゃなくて、何なんだよ！」その語気の強さに、リクは黙って玉城を見上げた。

玉城は木製の椅子に座り、畳みかけるようにリクに言った。

「俺のせいだったらかしとやりたいたんだ。俺は何も知らずにこの2カ月ここを離れてたろ？何か悔しいんだ。お前の力になるって言うっておきながら何にもしてやれなかった。リクが眠らずに何かと戦ってるんなら、俺が夜ずっと見張ってやるよ。俺のアパートに来てもいいし、それが嫌なら、俺がここに泊ってやってもいい。ライターの仕事は夜だって出来るんだ。そしたら少しは安心して眠れるだろうし、食欲だって・・・」

「玉ちゃん！」

リクの無遠慮な、苛立ったような声が玉城を遮った。

「何度も言ってるだろ。これは僕の問題だからって。もう、いい加減にしてくれないかな。うんざりなんだ」

第9話 亀裂

リクの冷ややかな、射抜くような視線が玉城を突き刺した。

思いがけないリクの言葉に玉城は一瞬頭に血を登らせ黙ったが、けれど更に自分の意思をこり押ししてきた。

「うんざりってなんだよ！ お前が苦しんでると思って俺なりに考えてやってるんだろ！」

「だから話すのイヤだったんだ」

リクはそう吐き捨てるように言うと言ち上がり、木製枠の窓の横に立った。

まだ高いはずの太陽はいつの間にか陰り、どんよりとした色が窓の外に広がっていた。

「少しは素直に人の親切を受けたらどうなんだよ」

玉城がリクの背に向かって言った。

「玉ちゃんはいつもそうだ」

「何が！」

「いつもそうやって親切を押し売りする。迷惑なんだよ」

「な・・・んだと！？ そんな言い方ないだろ。おまえは人の気持ちを押し量るとか感謝するとか、そういうの無いのか？」

「僕のこの力は僕の生まれつきの足枷あしかせだ。強まろうが弱まろうが僕の問題であって玉ちゃんが入り込んで来る事じゃないんだ。同情されたりするのが一番イヤなんだ」

「お前、そんな風に思ってたのか？」

「夜中、僕を見張ってどうするの。いつまで続ける気？ 一生？」

僕が死ぬまで？ 玉ちゃんは自分が満足したいだけなんだ。何かしてやったって」

「それが悪いのかよ！」

玉城は拳を握りしめ、眉間にしわを寄せて椅子から立ち上がった。

「だから何度も言ってるじゃないか。有りがた迷惑なんだよ。どうせ結局、何も出来ないくせに」

最後のそれは、とどめだった。

玉城は怒りに顔面をこわばらせ、今座っていた椅子をリクの方へ思い切り蹴り倒した。

椅子は派手な音を立てたがリクの元までは届かない。

沸き立つ怒りがおさまらず、今度はテーブルの上の500ミリリットルの茶のペットボトルを掴むと、力任せにリクに投げつけた。

それは除ける事もせず、ただ顔を背けただけのリクの胸を直撃し、鈍い音を立てて床に転がった。

「ああああそうか。悪かったよ！ お前がそんな風に思ってたなんてな。ガッカリだ。もう何もしないよ。好きにしろ。一人で籠もって、好きなだけ悪霊と仲良くして、勝手に心中でもしまえ！」

怒りにまかせて言葉を吐き出し、玉城は玄関ドアに向かった。胸を押さえ一つ咳き込んだリクの方に視線だけ流したが、もう振り返ることもせず、玉城は乱暴にドアを閉めて立ち去った。

寒々とした静寂が、残されたリクを包み込んだ。

リクは床に転がったペットボトルを拾い、玉城が蹴り倒した椅子を起こすとそこに座り、ズキズキと痛む胸を押さえてテーブルの上に伏せた。

終わってしまったのだ。リクは思った。

もう玉城は自分に失望し、怒り、ここへも二度とは来ないだろう。終わるのなんて、ほんの一瞬なのだ。

自分を弄び蹂躪する正体不明の影からは、どんなに足掻いても抜け出せないのに、大切なものは、その気になればほんの一瞬で壊せて、あっけなく消えてしまうんだ。

リクはヒンヤリとしたテーブルの天板に頬を付けて伏せたまま、玉城が置いていった食料品の山をボンヤリ眺めた。

自分の為にわざわざ買って、重いのに駅からぶら下げて歩いてくる玉城を想像すると、改めて申し訳なさと寂しさが込み上げてくる。あんな言い方をする必要はなかったかもしれない。

けれど、心の中にある危険を知らせる信号が、リクに必要な以上の悪態を吐き出させた。

素直に嬉しかった。玉城が側にいてくれたら、きっと心強い。

けれど、自分の中に正体不明の何かがいる。理性のない、ただ凶暴な何かが。

自分の手首を斬りつけてまでこの体を支配しようとするそいつが、自分を見張ってやろうとする玉城を傷つけないわけがない。

それを想像するだけで、リクは体中に鳥肌がたった。自分に対する嫌悪で震えた。

不意にテーブルの端で、朝から放置していたケイタイが鳴りだした。どこかに転がしていたのを、玉城がテーブルに載せてくれたのだ。数回コールを聞いた後、リクはゆっくり手を伸ばしてそれを掴み、耳にあてた。

「・・・はい」

『あ、リク？ 良かった、電話取ってくれて。さっきこっちに着いたばかりなんだ。昨日の夜は電話出来なかったけど、どう？ 眠れた？』

長谷川の声は、海の方こうからでも快活で心地よかった。

「ああ、大丈夫だよ」

『そっか。良かった。なるべく電話入れるようにするから。まあ、私は何も出来ないけどさ。あ、そっだ、玉城がすごく心配してたよ。少しでもあんたを助けたいって。まあ、騒がしいだけで役に立たな

いかもしれないけどさ、気持ちだけは優しくて熱い男だから。何でも頼ったらいい。その方が、あいつも喜ぶしね』

「うん・・・そうだね」

『どうした？』

「なんで？」

『元気ない』

「そんなことないよ」

リクは携帯をぐっと握み、声に力を入れた。

「こっちは気にしないでいいから。あれからすごく体調もいいし、変わったこともないし。電話もしなくていいよ。もう大丈夫だから」

『本当に？ 本当に体、どうもない？』

「うん」

リクは明るく答えた。

「嘘はもう吐かないよ。僕は、大丈夫だから」

第10話 途切れた記憶

「約束が違うんじゃないか？ 金は先月で終わりだと言ったはずだ。これ以上関わり合うと、お互いの首を絞めることになるぞ！」

汗ばむ手で受話器を握りしめ、男は喉の奥から声を絞り出した。

誰に聞かれているわけでもないのに、自然とそのトーンは卑屈に低くなる。

『おいおい、冗談だろ？ お互いつてなんだよ。俺がどんなに惨めな生活してるのかわかってんのか？ 仕事も出来ず、顔をさらして歩くことも出来ず。このまま日陰で腐って野垂れ死ねってえのか？

お前だけのうのうとしやがって。俺がサツに駆け込んだらどうなるか想像してみるんだな。食う物も食えなくなったら、何するか分かんねえぞ。お前はこの先もずっと俺の金づるだ。よく覚えとけ』

電話の相手は、とりあえず30万だと金額を指定して自分の方から回線を切った。

男の怒りは頂点に来ていた。

沸々と腹の底から沸き上がるドロリとした塊は、今や噴火寸前のマグマのように煮えたぎり膨張していた。

決壊が崩れる。

だが、一緒に地獄に堕ちるなど真つ平だ。

行くならヤツだけだ。馬鹿で薄汚い能なしのあの男だけだ。

けれど、ヤツに何かあったとき、洗い出されて自分が浮かび上がらないとも限らない。

そんなヘマは出来ない。

きつと何かいい方法がある。探せ。

そうでないと俺はそのうち、あいつに骨になるまで吸い尽くされてしまう。

男は震える手を握りしめ、力任せに机へ叩きつけた。

泥の中に、ずっぼりと埋め込まれたような感覚だった。

息苦しい。

けれど不思議と手首には痛みが無かった。

毎朝拘束された手首の痛みで目覚めるのが当たり前だったのに、眠りの底から目覚めたはずの今、どこにも痛みは感じない。

リクはゆっくり目を開け、そして、ボンヤリした頭で辺りを見回した。

湿ったコンクリートの壁にもたれて、リクは薄暗い路地のアスファルトに座り込んでいた。

微かな車の走行音と排気ガスのおい。乾いた街の無機質な匂い。

始めはまだ夢でも見ているのだろうかと思った。

だがそうではないことを悟ると、リクは急に体に冷水を浴びたような寒気と恐怖を感じ、力の入らぬ足でフラフラと立ち上がった。

信じられなかった。

ここがどこなのか、今がいつなのか、まるで分からないのだ。

急速に動悸が速まり、込み上げてくる不安を押さえようとするほどに呼吸が苦しくなった。

混乱する頭で何とか自分自身を確認してみると、服装は昨夜と同じだった。

ジーンズにTシャツにダークグレーの薄手のジャケット。

ようやく少しずつ昨夜までの記憶の回路が繋がってきた。

昨夜まだシャワーを浴びる前、体が異常に気だるくなり、テーブルに突っ伏してそのままじっとしていた。

また、いつもの貧血なのだと思っていた。

けれどそのあとどうしたのか覚えていない。眠ってしまったのか記

憶が途切れている。

動悸は治まるどころかますます激しくなり、自分自身が恐ろしくて忌まわしくて嫌悪感が止まらない。

震える指先で持ち物を確かめてみた。

衣服をさぐると、ジーンズの後ろポケットから財布と携帯が出てきた。携帯の時刻を確認すると、朝の7時過ぎだった。

辺りはひんやりしていて人通りも少ない。

リクは自分がどこに居るのかを確かめるために、路地から光の射す通りへ出てみた。

幸い見覚えのある商店街で、いつも内科医へ通う時に乗るのと同じ路線バスの停留所が近くにあった。

いったいいつここに來たのだろう。リクの家からは、その路線バスで15分くらいの所だ。

始発のバスが動き出してからだろうか。

なぜこんな所に來たのか。

考えれば考えるほど頭が混乱し、胃が締め付けられる。

リクは少し荒く呼吸しながら、無意識にジャケットのポケットに手をつ込んだ。

「・・・」

手にカチリと何かが当たった。硬質でツルンとした手触り。

慌てて取りだして見たが、確認するまでもなく、それは折り畳み式のナイフだった。

スケッチに行く時、鉛筆や木炭を削るのにちょうどいいので画材道具と一緒にケースに入れて置いたナイフだ。

確か画廊のオーナー佐伯が、何かの記念だと言ってリクにくれたものだ。柄の部分にリクのイニシャルが刻んである。

どうしてそれがポケットに？ 最近それに触った記憶はなかった。

リクは再びナイフをポケットに戻すと、昼間に比べるとまだ人影もまばらな通りを、力なく眺めた。

どこを見ても、何の答えも無かった。

早めの出勤のために駅に向かう中年のサラリーマンや学生、アルミ缶を自転車いっぱいに乗せて回収してまわっている老人。こんな早朝からから手動シャッターを開けている、小さな文房具店の店主。自分とは関係のない人々の動きをボンヤリ眺めてみたが、足元から這い上がってくる恐怖を止めることは出来なかった。

ブルーのラインの入った路線バスがリクの前をゆっくり走り、10メートルほど先のバス停で止まった。

2人ほど乗客を降ろしたあと、そのバスはまるでリクを待っているかのように乗車ドアを開けたまま、停止している。

答えが欲しい。誰でもいい、教えて欲しい。

リクはふらりと吸い込まれるように、そのバスに乗り込んだ。

第11話 心療内科医

「いや、正直驚いたよ。本当に君が玄関口に立ってるんだからね」
荻原医師はいつもの良く通る声で快活にそう言っていると、リクの前に煎れたての温かいコーヒーを置いた。

そしてまだポロシャツとジャージというラフな格好で、自分もリクの正面のソファに腰かけた。

そこはいつもリクが通う診療所に併設された、荻原の自宅の小さな応接室だった。

「診察室を開けてもいいんだけど、この方が落ち着くだろう？」
そう言って荻原は唐突に訪ねて来たリクを、快く招き入れてくれたのだ。

荻原は一時期総合病院に努めていたが、この診療所の医師を父に持つ女性の婿養子になり、ここを引き継いだのだという。

けれど僅か8年の間にその医師も荻原の奥さんも同じ癌で亡くなり、30半ばで何の因果か、しがないやもめ暮らしとなった。

コーヒーを入れる短い間に、荻原はサラリとそんな辛い身の上話をリクに聞かせてくれた。

思い悩んだ様子のリクの緊張を、ほぐすためなのかもしれない。

リクは荻原の声を聞きながら、そう思った。

「すみません。こんな朝早くに来てしまって。今日も診療のある日なのに」

リクが力のない声でそう言っていると、荻原は目尻に皺を寄せてニコリと笑った。

「私が言っただよ。いつでもおいでって。来てくれてうれしいよ。独り身の寂しい内科医は、仕事以外の時間はちよつと色っぽいDV

Dを見るか、白衣にアイロンを掛けるくらいしか、やる事が無くてね」

そんな冗談を言う荻原にリクは何とか微笑み返したが、胸の動揺はまだ少しも治まっていなかった。

ともすれば不安から後頭部が冷えてゆく感覚に陥り、胃がムカムカと吐き気を誘う。

「ねえ」

荻原は、そんなリクの青ざめた顔を覗き込みながら、真面目な声で続けた。

「朝、記憶にない場所で目覚めたって、本当かい？」

リクは頷いた。

ここへ通されたあと、不安のあまり、先ずそれを荻原に話したのだった。

「記憶が無くなるってこと、今までにもあった？ 泥酔して……とかは別にして」

荻原はそう言うのと、膝の上で手を組み、少し前屈みになってリクの目を見つめてきた。

「……いえ、初めてです」

「そんな気配もなかった？ 一度も」

荻原の目線がチラリとリクの左手首に流れると、包帯が見られているわけでも無いのに、リクは意識的に手をひっこめた。

「見知らぬ場所で気が付いたのは初めてですが、寝てる間に、体が僕の知らない行動を取っていたことはあります。その形跡がありました」

「行動を？ それはつまり君の意思ではないのに、何かに操られたようになっただけのこと？ 夢遊病のように、体だけが覚醒して動いた……とかじゃなく？」

荻原は険しい顔でリクの目を覗き込んでくる。

リクはその時改めて、自分が無意味なことをしているのに気が付いた。

荻原は、心療内科医の顔つきに変わっていたのだ。

少しでも気分がおさまれば、と思つて自分の不安の種を不用意に話してしまつたが、自分の問題はこの医師に何とか出来る問題ではないのだ。

自分を翻弄しているモノは、とうてい説明出来ない世界の輩なのだから。

「ごめんなさい、先生。もう帰ります。診療前に時間を取らせてしまつてすみませんでした」

コーヒーに手も付けず立ち上がったリクに、荻原は少し鋭い視線を投げた。

「その手に握っている物は何かな？」

「・・・」

リクはその声に改めて手元を見、ハツとした。

ポケットに突つ込まれた右手が無意識にナイフを握りしめ、その柄の部分が覗いている。

慌ててぐつと力任せにポケットに押し込む。

それと同時に襲つてきた目眩が、グラリと周りの世界を軟体動物のように歪ませ、リクは思わずテーブルに片手をついた。

すぐその横にあったコーヒーソーサーが、カシャリと甲高い音をたてた。

「岬くん、大丈夫!？」

「平気です・・・大丈夫。ごめんなさい」

手を差し出してくる荻原を避けるようにリクは立ち上がり、目頭を押さえた。

動悸が再び激しくなり、貧血を起こしたように目の前が再び暗くな

ったが、「帰ります」と絞り出すように小さく言つとリクはドアを開け、玄関へ走った。

「岬くん！」

荻原が追いかけてその肩を掴もうとしたが、リクはスルリと交わし外へ飛び出した。

「岬くん、必ずまたおいで。君はきっと医師の力が必要なんだ。今夜でもいい。明日の朝でもいい。必ずまた来なさい。私も電話するから。いいね！」

遙か後方で荻原の声が響いた。

診療所脇で出勤してきた若い看護師とぶつかりそうになり、驚いたように凝視されたが、構わずリクは走り抜けた。

“ 何かが居る。僕じゃない、何かが。”

渴いた喉が痛みを感じるほど激しく呼吸し、リクは来た路地を戻った。

フラリと大通りに足を進める。

お世辞にも繁華街とは言えない寂れた商店街であり、閉まったシャッターにはお粗末なグラフィTEEアートが殴り描きされている。人通りは尚もまばらで、その時間になっても閑散としていた。

どこへ行こう。

人恋しさに胸の疼きが止まらない。そんな気持ちになったことは初めてだった。

けれど、どこへも行く当てなどないのだ。

そのすべてを、自分が潰してしまったのだから。

第12話 お願ひ

朝の9時を少し回った頃。

社宅の自室で取材に出かける準備をしていた玉城に、シンガポールの長谷川から電話が入った。

薬缶を火に掛けながら玉城は電話に出た。

「はい。玉城です」

「おはよ。昨日は電話できなかったけど、そっちの様子はどう？」

「どう、・・・って。それは俺の事じゃないですね。直で電話したらどうですか？ 本人に」

インスタントコーヒーの粉をガサリとカップに入れながら、玉城は苦笑した。

「昨日はリクに直接電話したよ。元気だって言ってた。体の調子もいいて」

「そう・・・。じゃあ、元気なんじゃないですか？ 万事OKです」
玉城はまだ蒸気を出さない薬缶を見つめながら、さり気なく言った。
「・・・何？ 何かあった？」

長谷川の声のトーンが落ち、鋭くなった。

電話を通してでも、相手の感情を逐一読みとってしまう。彼女は刑事にでもなれば良かったのに。

玉城は正直、そう思った。

「別に。何もありませんよ。あいつは万事OK。自分の事は、自分で解決出来る大人だったってことです。お節介はいらないそうです」

「玉城！」

「長谷川さん、リクは大丈夫ですよ。俺よりよっぽど霊の扱いを心得てるし、余計な事をしたって、あいつの機嫌を損ねるだけだし」

『何をスネてんだよ、玉城』

「拗ねてなんかいません。ガツカリしたんです」

『何があつた？』

「何もないですよ。くだらないことです。心配してやったらウザイって言われたんです。親切の押し売りだって。自己満足だって。あいつにはガツカリですよ。馬鹿みたいです」

『・・・』

ほんの少しの沈黙のあと、長谷川が言った。

『ああ、馬鹿だよ。私こそあんたにガツカリだ』

「何ですか！」

今度こそ、長い沈黙が続いた。

電話が切れてしまったのかと思い、携帯を握り直した所に、長谷川の聞こえてきた。

驚くほど静かな声だ。

『リクが本気でそんなこと言うと、あんたは思ってるの？』

「なんで嘘を吐く必要があるんですか」

『リクはあんたに冷たい奴だって言われたのを、すごく気にしてたんだよ？』

「そうですか？ でも今は気にしてないみたいですよ」

『本気でそう思ってるの？』

「だって」

『お前は小学生か』

「何ですか！」

『リクは自分が辛いとき、辛いんです、助けてくださいって言うヤツか？ そうじゃないだろ？ 今のあいつは極限状態なんだよ』

「でも・・・。長谷川さんには分からないかも知れませんが、リクの周りに霊の匂いがしないんです。何にも感じられない。だから、何もしてやれないし、俺が出る幕はないかも知れないし」

『霊が関係してなかったら、自分には関係ないって？ 勝手に苦し

めばいいって?」

「そんなことは言っていないけど……。俺だって、あんなふうに見えるお腹が立つんです。人間ですから」

『玉城。……。あんたしか居ないんだ。頼むよ……。』

いきなり聞こえてきた長谷川の懇願の声に、玉城は一瞬ドキリとした。

それは、いつも豪快でパーフェクトで揺るぎのない女編集長の声では無かった。

愛しい者を想う、女の声だった。

「……。ええ。もちろん、これからも気にはかけますよ。……。大丈夫です」

『本当に?』

「ええ」

玉城がそう言った直後、ドアホンが鳴った。

腕時計を見ると、グルメディアスタッフが玉城をバンで迎えに来ると言っていた時間だった。

「じゃあ、……。迎えのスタッフ待たせてあるので。また連絡します。心配しないでください」

玉城は早口でそう言っていると、電話を切った。無意識に小さくため息が出た。

彼女はリクのせいで、すっかり心配性になってしまった。

まるで日本に子供を残してきた母親のようだ。そんなことを思ううちに、ほんの少し玉城の中の、リクへの怒りが和らいだ。

思い返せば、少しばかり大人げなかったかもしれない。

リクはいつだって無愛想で素っ気なく、干渉されることを一番に嫌うのだ。

いつもの事じゃないか。

玉城がそんなことを思いながら玄関ドアを開けると、カメラマン兼、本日の運転手の大西が又ツと顔を出した。

「もう行ける？ 玉城くん」

「あ、はい、すみません、迎えに来てもらって。すぐ行きますから」
玉城が荷物を取りに再び奥へ引っ込むと、大西はグイと無精髭だらけの顔だけドアの内側に入れ、ボソリと言った。

「ねえ、さっき一階の階段のところに、あの人がいたんだけど」

「え？ あの人が？」

「ほら、画家のミサキ・リクって人。あの人目立つからすぐに分かった。本当に綺麗だもんね。思わず近くでジーツと見ちゃったもん」
「リクが？」

「玉城くんに会いに来たのかと思ったけど、違ったのかな」

玉城が慌てたように靴を履こうとしているのを見て、大西は言った。
「ああ、でももうとくに帰っちゃった。俺が『画家のミサキさんですよ？』って声かけたら、避けるようにスーッとね。あの人、愛想ないよね。男も女も、美人ってやつはそうなのかね。才能もすごいんだろうけど、人間的にどうなんだろうねー。ちょっと付き合いたくないタイプだなあ」
「・・・」

もう、追いかけても間に合わないな。

そう思う傍ら玉城は、普段は気のいいこのカメラマンに対して、腹立たしさが沸き上がってくるのを、しばらく止めることができなかった。

第13話 クリムゾンの挑戦状

意識が朦朧とするほどの疲労感を引きずり、リクは自宅へ戻ってきた。

玄関ドアに触れてみると、やはり鍵は掛っていなかった。

外よりもヒンヤリした室内に入った後、リクはリビングを見渡した。ここを出ていった時の記憶がない。

記憶が無いだけなのだろうか。

それとも、その時の自分は、自分以外の『何か』だったのだろうか。考えるほどに怖くなり、何も食べていないだろう胃がキリキリと痛んだ。

やはり食欲は湧いてこない。その事がますますリクを不安にさせた。頭がふらつき、思考がまとまらず、意識が飛びそうになる。

けれど眠ってしまったら最後、自分は自分でない『何か』になる。

もしかしたらそうするためにそいつは、この体を弱らそうとしているのだろうか。

だとしたら、もう既に浸食が始まっている。

この体は、自分じゃない意思に少しずつ取り込まれようとしている。

リクはそんな非現実的で馬鹿らしいことを考えながら、少しずつその状況に慣れようとしている自分にも気がついていた。

“自分？”

今までの自分に、どれほどの価値があっただろう。

今の自分が消えて、別の何かに成ったとして、それがどうしたというのだ。

誰が悲しむというのだろう。

そう思った瞬間、僅かな寂しさと、それを上回る開放感が体を満たした。

そうだ、きつとしがみつく価値など、元々ありはしなかった。

リクはボンヤリとした頭で再び部屋を見渡しながら、昨夜の記憶を拾い集めてみた。

リビング左手奥に、画材一式を置いておくための小部屋がある。

描きかけの状態のままイーゼルに立てかけたキャンバス等が置いてある、2畳ほどのウォークインクローゼットだ。

その扉が少しばかり開いている事が、なんとなく気になった。

この数日、出入りした記憶は無いのに。

近づいて何気なく中を見たリクは、ゾクリと鳥肌を立てた。

まるでリクに見せつけるかのように、イーゼルに立てかけたキャンバスの絵が、こちらを向いていた。

それはリクが描いた記憶のない絵だった。

いや、絵ですら無い。ただの、暴力的な落書きだった。

6Fの小さなキャンバスは一面の赤みを帯びた肌色。

絵の具を塗りたくってマダラになった海の中、左上から斜めに赤い亀裂が走っていた。

それはまだ乾ききっておらず、鮮やかなクリムゾンが血のように滴っている。

それと同じモノを、リクは知っている。

忘れることも逃れることもできないその醜い傷は、今、自分の背中にある。

リクはもう、考えることに疲れたように、ただボンヤリとそのキャンバスを見つめた。

自分が描いた記憶のない絵。

それは自分を取り込もうとしている『何か』からの挑戦状なのだろうか。

「くだらない。・・・もう、好きにすればいいさ」

そう小さく呟いた声が、たった一人のリビングに空虚に響いた。

不意にジーンズのポケットに入れっぱなしだった携帯のバイブが震えた。

長谷川だろうか。

ほんの一瞬、温かな安堵が胸の中によぎったが、画面に表示されたのは未登録の番号だ。

電話の相手は荻原医師だった。

『岬くん。朝、あんな形で君を帰してしまつて、ずっと気になつてたんだ。今日は午後診も無くて時間が空いてるから、これからまた家にこない？』

「これからですか？」

『君にはちゃんとした治療が必要だと思う。本当は私が力になつてあげたいんだが・・・。腕のいい心療内科医がいるんだ。紹介状を書くよ。・・・ね？』

「いえ、もう・・・」

『他の医者がいやなら私と話をするだけでもいい。このままでは良くないと思うんだ。きつと君だつて苦しいだろ？ あ、別に不安にさせようとしてる訳じゃないんだけど・・・どうにも、私の性分で』

少しばかり慌てて言い添える所にまで荻原の優しさが感じられ、リクはほんの少し微笑んだ。

「僕は、あなたの手には追えませんよ。それでも？」

リクの言葉に荻原も電話の向こうで微笑んだのか、少しばかり間を

開けてから、落ち着いた低い声で返してきた。
『いいね。興味深いよ』

第14話 闇の入り口

「・・・出ないな。くそっ！」

昼過ぎに取材を終え、来たときと同様カメラマンの西山の車に乗り込んだところで玉城は、ずっと気になっていたリクに電話を入れたのだが、その感情はすぐさま苛立ちに転じた。

今日はちゃんと電源を入れていたが、何度コールしても出る気配がない。

“俺だと分かって出ないのか？ いや、また携帯を置きっぱなしで出かけているのか。”

携帯の画面を睨みながら、玉城は不毛なため息をついた。

「あれ？ 彼女ですか？ 玉城さん」

同行していた大東和出版のディレクターがニヤツとして玉城の携帯を覗き込んだ。

つい最近彼女が出来たらしい30歳前後のそのディレクターは、やたらと「女」の話に話題を振りたがる。

「ええ、そうですよ。美人だけど冷たい奴だね。昨日也大喧嘩した所です」

玉城は適当に作り話をした。彼女がいなしと思われるのも癪だった。「へー、そうなんですか。ダメだなあ、謝っちまったほうがいいですよ。綺麗な女は、チャホヤするのが長続きする一番のコツなんですから。冷たくしたら、すぐに他の男に取られちゃいますよ」

ディレクターは、自信満々にレクチャーする。

「へー。そんなもんなんですかね」

玉城は、この嘘話が少々楽しくなってきた。

頭に思い浮かべているのは、もちろんリクだ。

「実際ね、そいつ、いい男が居るみたいなんです。強くて逞しい男がね。今、シンガポールに海外赴任中なんですが」

そう話す玉城の脳裏には長谷川。玉城は必死で笑いを噛み殺した。

「えー！ 何ですかそれ。負けちゃダメですよ玉城さん。そんな遠距離のヤツに負けてどうすんですか。プライド持って行きましようよ。ね。ガツンと行きましよう。こういうのは勢いなんですから」まるで説得力に欠けるディレクターのアドバイスに、玉城は可笑しくなった。

「そうですかねえ。でも実際その海外赴任の男の方が、包容力も経済力も上なんです。なんて言うか、男の自分でも惚れそうな男っていうか・・・」

「はあ？ なんですか？ 危ない方に走らないでくださいよ」ディレクターは笑いを堪えて、しかめっ面をして見せた。

玉城も自分が何を言ってるのか分からなくなり、「本当ですよ」と適当に返し、その話を打ち切った。

混沌とした意識の上に、重苦しい鉛のカーテンが垂れていた。

ゆらゆらと揺れ、魔術か何かの力を借りて、体が目覚めないように邪魔をする。

それらすべてに逆らって重い瞼を開けると、薄汚れた天井と、笠も何もない裸電球がボンヤリと視界に映った。

・・・ここはどこだろう。

じわじわ、不安と疑問が体の感覚と共によみがえり、リクはゆつくり体を起こした。

自分が寝ていたのは、毛羽立ってささくれた、シミだらけの畳の上だった。

ブンと何か、饅^すえたような嫌な匂いが鼻をついた。

まだ霞む目を凝らしてぐるりと周りを見回すと、そこが4畳半くらいの古い和室なのだと分かった。

目にするすべてが黒ずみ、生活の垢にまみれている。

部屋の引き戸は開け放たれており、その先の暗がりには流し台と、塗料の褪せた木製ドアがある。

ここが古いアパートの一室なのだとということまでは推測できたが、なぜ自分がここに居るのかという記憶は、まるで無かった。

薄汚れてビリビリに剥がれた壁紙、ガムテープでひび割れを補強してある窓ガラス。畳一面に散らばっているコンビニの袋、カップ麺のゴミ、焼酎の空き瓶。

ゾクゾクと虫のように這い上がってくる不安と不快感が喉元を締め付け、リクは堪らずに立ち上がった。

饅えた匂いが一層ムンと強まり、いつもよりも酷い立ちくらみに襲われたが、けれど倒れる暇は無かった。

リクの目は、今度こそ本当に理解しがたいモノを捉えてしまっていた。

小さなちゃぶ台の向こう側。

シミだらけのふすまの手前に男が一人、仰向けに倒れていた。

顔は向こうを向いているが、その土気色の肌と、奇妙に硬直した手指から、男が寝ているのでは無いことは、すぐに分かった。

男は死んでいた。

触れても近づいてもいなかったが、それは直感としてリクの脳を貫いた。

床に面した男の背中にどす黒いシミが広がっており、その体の頂点、つまり胸の上には真っ直ぐにナイフが突き立てられていた。

そのナイフには見覚えがあった。

僅かに残った気力が辛うじてリクの正気を保とうとしていたが、そのナイフを見た瞬間、すべてが支えを失い、足元から崩れ落ちた。

あれはポケットに入れっぱなしにしていた自分のナイフだ。

片付ける時間はいくらかでもあったはずなのに、なぜか一度もポケットから出そうとしなかった折り畳み式のナイフだ。

木製の柄の部分だけを残し、刃先を体に深く沈み込ませてしまっているその凶器を、リクはただ愕然と見つめた。

第15話 もう帰れない

土気色のその男の顔は、向こう側を向いていた。

けれど、覗き込まなくても、それが見知らぬ男だということは分かった。

エラの張った髭だらけの風貌にも、ずんぐりした寸詰まりの体軀にも見覚えがない。

窓の外はすっかり暗くなっていたが、いったい今が何時なのか分からない。

携帯を取りだし時間を確認する気力もなく、ただ少しばかり思考が戻ってきたリクに考えられたのは、この忌まわしい空間から出ていくことだけだった。

力の入らない足で、ふらつきながら玄関口へ走る。

けれど、それを鋭い声が止めた。

《ナイフを抜け！》

ビクリとして立ち止まり、振り返った。もちろんリク以外に部屋には誰も居ない。

叫んだのは自分自身だった。

それがどういう事なのか考える事も出来ぬまま、リクは素早く引き返すと死体の横に立ち、目を反らしながら胸に刺さっているナイフを握った。鯁えた畳の匂いと血の匂いが混ざり、ムンと鼻を突く。力を込めて引き抜こうとしたが、まるで肉に溶け込んだかのようにナイフはびくともしない。

リクは込み上げてくる吐き気を堪え、やはり目を背けたまま死体を跨ぎ、両手でナイフの柄を掴んだ。

そして力を込めて一気に引いた。

又チャリと身の毛もよだつ粘りけを含んだ音をさせ、ナイフは辛うじて抜けたが、リクの精神力は限界に来た。

慌てて流し台まで行き、何度も何度も嘔吐を繰り返したが、空っぽの胃からはわずかな胃液しか出てこず、ただ苦しくて涙ばかりが流れ落ちた。

手に握ったままのナイフには赤黒い血が糊のようにこびり付いている。

リクはそれを流し台にかざすと水道の蛇口を捻り、まがまがしいクリムゾンを洗い流した。震えの止まらない手で一振りして水を切り、それをポケットに突っ込んだ。

そんなことをする意味も分からず、機械的にそんな行動を取る自分が、本当に自分であるのかどうかも分からなかった。

細かく震える体をなんとか玄関まで運び、転がっていたスニーカーを履くと、すぐにリクは部屋を飛び出した。

自分が出てきた建物は、昭和の途中で忘れ去られたような、朽ちかけたアパートだった。

もちろん、見たこともない。

さっきまで居た部屋は1階の隅に位置しており、数歩歩けばもう、雑草だらけの前庭だった。

敷地内を飛び出しても、そこが何処なのか、まるで分からない。

街灯もまばらで、あたりの民家もひっそりと息をひそめ、部屋の明かりも門灯もついていなかった。

すべてがリクを嘲笑うかのように無機質で余所余所しく、心臓が冷却器にかけられたように冷えてゆく。

どこを見ても何も思い出せず、不安がヒタヒタ体を浸食し、心臓は

もう、これ以上の負担に耐え切れそうになかった。

リクはまるで親にはぐれて迷子になった子供のように辺りを見回し、怯え、浅く早く呼吸を繰り返した。

大きな通りに出れば、なにか分かるかも知れない。

そう思う反面、そんなことは不可能にも思えた。

もう、戻る道などないのかも知れない。

どこかで足を踏み外し、抜けられない穴に落ちてしまった。

もう、帰れない。

どこへも、逃げられない。

ポケットに入れた携帯が震えだしたのはその時だった。

しばらく細かな振動を感じてボンヤリしていたが、リクはゆっくりとそれを取りだしてボタンを押した。

『リク？』

それは、突き抜けるように明朗で力強い長谷川の声だった。

「・・・長谷川さん」

『な、なによ。なんて声出してんのよ。ビックリするじゃない。ねえ、あんた大丈夫？ 玉城と昼間電話して、ちよつと気になってさ。またあんた達、しょうもない喧嘩してんじゃない？』

「長谷川さん」

『だから！ そんな声出さなって言ってるでしょ？ あんまり電話するとあんた嫌がると思って我慢してんのにさ。そんな細い声出さなら、毎日電話するよ？ いいの？』

「ごめんね」

『・・・何が』

電話の向こうの長谷川が一瞬、息を呑んだような間が開いた。

『リク？　ねえ、どうした？　何かあった？』

ただならぬものを感じ取った長谷川の声に緊張が走る。

リクも一つ、ゆっくりと息を吸った。

喉の奥が震えた。

「ごめんね、長谷川さん。・・・もう、終わりにしていい？」

『何？　何言ってるか分かんないよ。リク！』

長谷川の声は次第に大きく、悲痛になった。

『リク？　ちゃんと会話しようよ。ねえ、聞いてあげるから。何でも聞いてあげるから。ねえ！』

リクは必死に話しかけてくる長谷川の優しさに、ほんの少し微笑んだ。けれど、

「ごめんね、長谷川さん。ありがとう」

その言葉を告げて、電源をオフにした。

それがどんなに罪深い事なのか、どんなに自分を想う相手の心を苦渋の闇に落とし込む事になるのか。

そんな事も、もう今のリクには、分からなくなっていた。

第16話 リクを捜して

「・・・あたま痛て・・・」

頭痛と喉の渇きが、玉城を泥のような眠りから揺り起こした。

転がったままカーペットの上の散らかり様を見て、玉城は昨夜、相当飲み過ぎたことを悟った。

昨日の取材のあと、その後の予定の無かったカメラマンの西山と、ずっと玉城のアパートで飲んでいたのだ。

西山が「俺、明日仕事なんで、帰るわ」と部屋を出て行ったのは、確か日付が変わった頃だったと、玉城はボンヤリ思い出した。窓の外を見ると、まだ薄紫の夜明け前だった。

鈍痛を堪えゆつくり上半身を起こす。

ローテーブルの上も、ビールの空き缶やスナック菓子の袋、カップ麺の残骸でてんこ盛りだ。

ウンザリしながら、足元に転がっていた電池切れの携帯を拾い上げ、充電アダプタに繋いだ。

こんな時、一緒に飲んだのが女の子だったら、この空しい感じは無いんだろうに。テーブルの上だつてちゃんと片づいてるだろうに。そんな身勝手な理想を思いながら、玉城は携帯の電源を入れた。

携帯はひとつブルリと震え、そこに表示された画面を見て玉城はギョツとした。

長谷川から、恐ろしい数の着信が入っていたのだ。

「うあ・・・怖ええ・・・」

最初の着信は昨夜午後11時。一番最後の着信は、ほんの1時間前だ。

いったい何でこんな時間に・・・。

一瞬にして2日酔いのモヤが吹き飛び、玉城は大きく深呼吸して、長谷川に返信しようとした。

しかし、ふと指が止まる。

“あれ？ このまま着歴たどつても繋がらないよな・・・”

どうするんだっけと暫く携帯を見つめていると、その視線を察知したかのように、玉城の手の中で携帯が雄叫びを上げた。

驚いて落としそうになった携帯をぐっと掴みなおした玉城は、やはり何かあったのだろうか、と少しばかり身がまえた。

「はい」

『電源切ってんじゃないよ！ あんたまで！ 何やってんのさ！』いきなりの落雷だ。

「な、何やってるって・・・いったい何なんですか」

『あんたしか居ないのに！ ちゃんと連絡取れるようにしときなさいよ！』

「だから何なんですか。俺だって酒飲んで、朝までぐっすり寝ることだってありますよ。24時間営業じゃないんですから」

『リクが・・・』

長谷川の声が急に詰まって途切れた。

「え？ リクがどうかしたんですか？」

『今すぐリクの家に行つて来て。ちゃんと帰ってるか、見てきて。お願いだから』

いつもとはまるで違う、懇願するような長谷川の声に、玉城の胃はギュンと縮んだ。

「何かあったんですか？」

『あとで話す。何かあの子おかしいんだ。とにかく急いで！』

もう既に立ち上がり、ジャンパーを掴んでいた玉城は、財布とその携帯だけ持って外へ飛び出した。

まだ空は明け切っておらず、始発の電車まで少し待たなければならなかった。

それでもタクシーを飛ばすよりも、電車を待った方が早い。

その間に再び掛かってきた長谷川の電話で玉城は、昨夜のリクとのやり取りの一部始終を聞いた。

「あの馬鹿タレが！」

リクの事が心配でもあったが、そんなメッセージを残して電話を切るという身勝手な行為が腹立たしくて堪らなかった。

相手が、飛んで来ることの出来ない距離にいる長谷川なら、尚更だ。

「まったく！ 自分を心配する人間の気持ちなんて、少しも分かってないんですよ、あいつは。無神経で自己中でバカなんです。山から下りてきたばかりの猿並みです。大丈夫ですよ長谷川さん。あいつを見つけてぶん殴って来ますから！ 長谷川さんの分まで」

息巻く玉城に、長谷川はやっと電話の向こうで少し笑った気配を感じさせた。

『乱暴しないでよ、玉城。リクはきつと今、それどころじゃないんだ。たった一人で戦ってるんだと思う。・・・たぶん』

「それが水くさいって言うんです。ああ、もう、ハラ立つ！ もし家に居なかったら、街中を探し回って絶対見つけだして、ぶん殴ってやる」

始発の電車が滑り込んできた。どんなに急いでもリクの家まで50分以上はかかる。

その頃また電話かけるから、と言い残して長谷川は電話を切った。

玉城は無駄だと思いつつも、リクの携帯に電話を掛けてみたが、やはり繋がらない。

怒りが更に増した。

いや、ちがう。

腹を立てていたかった。

不安や心配で息苦しくなるのは、まっぴらだった。

ドクドクと早まる自分の鼓動を、腹を立てることで沈めたかった。

《もう、終わりにしていい？》

そんな言葉、いったいどういう状況になったら吐けるのか。

“俺の助けはあんなに拒んだ癖に！”

乗り込んだ始発電車の扉際に立った玉城は、込み上げる苦い想いに堪らなくなり、拳を冷たいドアに打ちつけた。

第17話 失われた朝

玉城は最寄り駅から、いつもの循環バスは使わずにタクシーに乗り込んだ。

先程までぐうたら眠っていた自分に腹が立って仕方がない。今は一分一秒が惜しかった。

緑が濃くなり、リクの家が近づくと玉城は心の中で祈った。
どうか、家に居てくれ、と。

リクの家の前に着くと、慌ただしくタクシーを降りた。

少し待たせておこうかと振り返ったが、すでにタクシーは走り出した後だった。

どのみち、リクがここに居なければ行く当てもない。お手上げなのだ。

玉城はぐっと、そのログハウス調の家のドアを睨みつけた。

「あれ！」

僅か10センチばかり開いている玄関ドアを見つめながら、玉城は小走りに近づいた。

カギを掛けないことはあったが、ドアが開けっ放しだったことは初めてだ。

開けたまま外出ということは考えにくかった。

・・・中にある。

玉城は半ば確信し、安堵とともに部屋に飛び込んだ。

部屋の中は薄暗くヒンヤリしている。

人の動く気配は全くない。

「リク！」

大声で呼びながら足元を見ると、狭い三和土にスニーカーが転がっていた。

「いるんだろ？ なあ！」

ホッとしながら自分も靴を脱いでリビングに上がり、檣材の大きなテーブルを迂回した。

けれど、回り込んだ床に転がっているものを見つけた瞬間、玉城の心臓は一瞬にして縮み上がり、硬直した。

テーブルとキッチンへの入り口のちょうど真ん中あたりに、リクが倒れていた。

こちらに背を向ける形で横向きになっていて、顔は見えない。

その体はピクリとも動かず、場所的にも眠っていると言うより、転がっていると言った方が近かった。

苦しくて藻掻いたかのように白いシャツは乱れ、華奢な肩が露わになっている。

シャツから覗く肩と細い首の、あまりの白さに玉城は震えた。

「リク！」

玉城は走り寄ると、すぐに頬に触れ、首筋に触れた。

頬は氷のように冷たく唇にも血の気が無かったが、首は仄かに温かく、弱いながらも脈を打っていた。

口元に顔を近づけると、ちゃんと呼吸もしている。

その頃になってやっと玉城の心臓はバクバクと激しく打ち始め、安堵と冷静さと怒りが、血流とともに蘇ってきた。

ざっとその体に目を走らせると、白いシャツの腹あたりに、赤黒い血のようなシミが僅かに点々と付いている。

玉城は力一杯、リクの肩を揺すった。

「おい、リク！ 起きろコラ、リク！」

青ざめた臉も唇も何の反応も無かった。

玉城はその頬を何度も叩き、再び両肩を掴み強く揺すった。こういう場合の対処法などまるで知らず、タブーを犯しているのかも知れないと思ったが、不安でじつとしていられない。玉城は更に名を呼びながら揺すった。

「リク！　おい、起きろって言ってるんだろ！　おい！」

もしかしたら、体のどこかに本当に致命的な怪我でもしているのだろうか。

頭を強く打つてるとか・・・。

ふと、そんな不安がよぎり、その肩から手を放した時だった。

眩しそうに顔をしかめ、小さく声を出した後、リクは目を開けた。

感情の分らないガラスのような琥珀の瞳が、不安げに覗き込む玉城の目を見上げてきた。

「リク！」

「うるさいな」

驚くほどはつきりした声でそう言うと、リクはゆっくり上半身を起こし、小さく首を振った。

手でフワリとその艶やかな髪をかき上げ、驚いた目で自分を見つめている玉城に、再び視線を合わせた。

「うるさいって・・・。お前、まさか寝てたのか？」

「死んでるでも思った？」

リクはニヤリと笑い、その場にあぐらをかいた。

「ふ・・・ふざけるなよ、お前！　長谷川さんがどれだけ心配したと思ってるんだ。俺だって飛んで来たんだぞ。いったい何のつもりだ！　冗談だったなら、ただじゃおかねえぞ！」

玉城が怒りで顔を赤らめながらリクの右腕を掴んで揺すると、あからさまに迷惑そうな顔をしてリクはその手を振り払った。

そして自分の汚れた服をマジマジと見つめ、顔をしかめた。

「うわ、気持ちワル・・・血が付いたまんまだ。そういえば昨日、シャワー浴びなかったな」

リクは玉城など眼中に無い様子ですつくと立ち上がると、まるで小さな子供のように何の躊躇いもなく次々と服を脱ぎ始めた。

白い綿シャツ、ジーンズ。

赤い付着物で汚れたそれらが許せないらしく、まるで親の敵のようにどんどん脱ぎ捨ててゆく。

「リク・・・なあ、話を・・・」

玉城の言葉がしだいに歯切れ悪く萎んでゆく。

呆然とその様子を見ている玉城の目の前で、リクはすべての服を脱ぎ捨てた。

いきなり素っ裸になられ、玉城はついには場違いな説教じみた言葉を呑み込むしかなかった。

足元に山となった衣服や下着をどう処分しようか悩んでいる青年のその背中には、あの痛々しい傷と火傷のあとが生々しく浮かび上がっている。

首筋から肩胛骨までの、女性のような白く滑らかな肌とは対照的に、そのケロイドはまだ熱を帯び、怒りに燃えているようにさえ見える。その漣うねみの中を斜めに切り裂く無惨な刃痕は、ほっそりとした腰を越え、再び白く柔らかな臀部の上にまで伸びている。

こんな間近で直視するのは初めてで、玉城はそのグロテスクさに思わず息を呑んだ。

「ねえ」

リクは視線を感じたのか、玉城を振り返った。

「シャワーしてくるね」

無邪気な子供のようにそう言うと、リクは汚れた服一式を拾い上げ、裸の腕にかかえてシャワールームの方へ歩き出した。

「待てよ！」

玉城がその背中に鋭い声を投げつけた。

リクが、無表情でゆっくり振り向く。琥珀色の、ガラスの瞳が一瞬、好戦的に光った。

「お前・・・誰だ」

低く唸るように言った玉城の言葉に、青年は微かに嗤った。

第18話 弔い

「誰って訊かれても困るな。僕は、僕だよ」

リクはサラリとそう言うのと、服を丸めてキッチンのダストボックスへ放り込み、さっさとシャワールームへ入って行ってしまった。

その赤黒いシミを付けた衣服は、洗う余地もなく、その青年に不浄なものとして処理されたのだ。

当の玉城は、自分の口から出た「お前、誰だ」という言葉に自分で衝撃を受け、リビングの隅でシャワールームのドアを見つめたまま固まった。

そんなこと、あつて良いはずはない。けれど、あれはリクじゃない。絶対に違う。

リクは腹の立つ憎まれ口も叩くが、人をあざけるような、あんな目はしない。

けれど、あれがリクでなければ、誰なんだ。

リクはどこへ行ったというんだ。

玉城は蒼白になり、グルグルとリビングを歩き回った。

“ いったい、何なんだ。これは、何なんだ ”

ほどなくしてタオルで髪を拭きながら戻ってきたリクは、もうすでに清潔な空色の綿シャツとジーンズに着替えていた。

血の気がもどってほんのり上気した艶やかな頬も、穏やかな口元も、健全な青年のモノであり、自分が投げつけた質問こそ馬鹿げているようにも思われた。

けれど玉城は一言も喋らず、観察するようにじっとリクを目で追う。リクはそれに気付いたのか、チラリと玉城に視線を流したが、一瞬侮蔑の色を浮かべただけで、まるで興味無さそうに顔をそむけた。

ソワリと玉城の背が、苛立ちと不快感に粟立った。

“違う！・・・リクじゃない！”

玉城の胸の内では起こっている激しい疑念をよそに、リクはタオルを首に掛けると軽い足取りでキッチンへ行き、冷蔵庫のドアを開けて中身を物色し始めた。

「腹減ったな。あ、何か、いっぱい入ってるね。チーズに生ハムにサラダにワイン」

楽しそうにそう言うリクは赤ワインを掴みだし、玉城の方へ振って見せた。玉城がリクの為に買って来た、インド土産のワインだ。

「ねえ、ワインでお祝いしようよ。お祝いする時って、お酒飲むでしょ？」

玉城が間髪入れず、返した。

「何の祝いだよ」

「ハッピー・バースデー」

「お前、2月生まれだろうが！」

玉城が睨みつけるように言うと、リクは引き出しを引っかき回して見つけたコルクスクリユーでワインのコルクを器用に抜きながら、肩をすくめて笑った。

「へえ。・・・よく知ってるね。仲いいんだ」

リクは更に「ワイングラス無いんだな」とぼやきながら大きめのグラス二つを取り出し、中央のテーブルにトンと置いた。ボトルを高く掲げ、ドボドボと溢れんばかりに赤ワインを注ぐと、テーブルの横に仁王立ちしている玉城に、その片方のグラスを差し出した。

「じゃあ誕生祝いはやめて、弔いのお酒にしよう？ お葬式しようよ」

いつも少しだけ背の高い玉城を見つめてきた、臆病で寂しがり屋のあの青年の瞳はそこにはない。

そこで玉城を見据えているのは、傲慢で無遠慮な、正体不明の男の目だった。

玉城は込み上げてきた怒りと絶望的な悲しみに任せて、そのグラスを払いのけた。

ワインの入ったグラスは軽々とはじき飛ばされ宙を舞い、壁に当たって砕け散った。

ログハウス調の温かな木目の壁から、飛び散った液体が血液のように垂れ、濃厚な甘い香りと共に床に広がった。

「お前、誰なんだよ！」

「ふん。野蠻人」

リクは短くそう言うと、手に持ったもう一つのグラスのワインを、ジュースのように一気に飲み干した。

そうして空になったグラスを、同じように乱暴に壁に投げつけると、その碎ける音と共に玉城を睨みつけた。

「僕がリクじゃなかったら、誰なんだよ」

「知らねーよ。だから訊いてんだろ？」

「ふーん」

人形のように無機質な目が、一瞬好戦的に光った。

「仕方ないね。じゃあ、本当のことを教えてあげる」

リクは胸が触れ合うほど玉城に体を寄せ、肩を抱き、その耳元に唇を寄せて呟いた。

「あなたのリクは、昨日、死にました」

語尾で、その唇がニヤリと笑った。

怒りに目眩がした。

その青年を殴りつけようと体を離れた玉城は、相手の右手が舞うよ

うに宙を切ったのを目の端に捉えた。

けれどその意味を理解する前に、次の瞬間にはその拳が激しく玉城のみぞおちに食い込み、火花が飛び散るような痛みに体を折り曲げた。

思いもしなかった青年からの攻撃に、まるで何の防御も出来なかった。

呼吸ができない。

何とか足を踏ん張り体勢を整えたが、肩をグイと掴まれたあと、今度は膝蹴りを同じみぞおちに食らった。

更に激しい痛みに玉城は今度こそ膝から崩れ落ち、無様に床に転がった。

喉まで胃液がせり上がり、痙攣し、苦痛の涙で視界がぼやけた。

息をしる。

慌てるな。

慌てるな！

半分意識を失いながら石のように体を丸めた玉城の横に、青年は静かにしゃがみ込んだ。

玉城の意識が有るのか無いのか確かめるように、そのヒンヤリした細い指が、玉城の頬を撫で、そしてトントンと戯れるように軽く叩く。

玉城が動けないのを確認すると、僅かに赤ワインの香りの吐息をさせて、青年は呟いた。

「これから大事な用事があるんだ。あんたに邪魔されたくないんでね。さあ、ようやく始まるよ。

物語の最終ステージが」

第19話 偽りの電話

“こいつ・・・何する気だ？”

玉城は一向に引かないみぞおちの痛みを折り曲げたまま固まっていた。

呼吸をするたびに胃のあたりの筋肉が突き刺されるように痛む。

それに今動くと、再びこの男に殴られかねない。リクの体に入り込んだ何者かに。

玉城は浅く呼吸をし、石のように動きをセーブした。

何かがリクの体に憑依している。

何故か靈感が今のところ全く働かない玉城には、その正体の片鱗すらも伺うことはできなかったが、リクがリクで無いことはもう疑いようがなかった。

嘘や演技などでは有り得ない。

しかしそれは一時的なモノに違いはないのだと玉城は思った。

“さつき、この男が言ったことは、きつとただの冗談なのだ。そうに違いない。リクが居なくなるはずはない。そんなことは馬鹿げている。”

今はただ、この男の出方を見よう。どうするかは、そのあと考えればいい。

大丈夫。きつと元通りになる。いなくなつてたまるか！”

確信と言うよりは、祈りに近いそんな思いを抱きながら、玉城は疼く痛みに耐えた。

リクの手が再び、その玉城の体を探り始めたのはその時だった。

ジャケットのポケットの上を触り、そのあとジーンズの前、後ろポケットへ滑る。

後ろポケットで手が止まり、そこからスルリと玉城の携帯を抜き取

ると、青年は独り言のように「これ借りるよ。自分の携帯、どっかに捨ててきやがったから。あいつ」と呟いて、どこかへ電話をかけた。

“あいつ”とは、リクの事なのだ。

玉城ははらわたが煮えくりかえるような気持ちで、それを理解した。やはり、もうそこには“リク”はいないのだ。

込み上げてくる悔しさと悲しさと、『もし取り戻すことが出来なかったら』という焦燥感に、思わず叫び出しそうになった。

「あ・・・、よかった。僕です。リクです。こんな朝早くに電話してごめんなさい」

青年は、電話に出たらしい相手と話し始めた。

その口調は物静かで、まるでリクそのものだ。玉城は怒りを抑えながら耳をすませた。

「先生、僕、どうしたらいいのかわからないんです。今朝、また記憶が無くなってしまって。気がついたら知らないアパートに居たんです。僕の目の前に、知らない人が倒れてて、血だらけで・・・。僕のナイフが刺さってて・・・。

先生、どうしよう。僕、人を殺してしまったかもしれない。もう・・・。どうしたらいいのかわからないんです」

その語尾は、不安そうに震えている。

“人を殺した？ それは何の冗談だ。どこまでが作り話なんだ？”

そしていつたい、誰に救いを求めているんだ？”

玉城の頭の混乱はますます酷くなった。

「お願いします、先生。今から会いたいんです。助けてください。僕

を助けてください！」

玉城は目を閉じたまま息を殺し、じつと青年の一言一句、声色を伺った。

「本当ですか？……ええ、そのアパートにもう一度行く勇気が無いんです。夢や勘違いではありえません。……一緒に行ってもらえますか？ そのアパートの近くに小さな廃工場があるんです。華南ロータリーの近くの、松井モータース。……ええ、そこです。そこで落ち合わせてください。……今からいいですか？ はい、僕もあと40分もすれば、そっちに行けますから」

そこまで淀みなくしゃべり電話を切ると、青年はもう無用とばかりに、その携帯をポンと玉城のそばに転がした。

青年の表情は見ることは出来なかったが、腹立たしいほど冷静で、満足げなのが伝わってくる。

今の会話のほとんどが芝居であり、誰かを陥れる罠であることは疑いようがなかった。

そして、目の前の青年の中に、もうリクが居ないことも。

リクは誰かにあんな風にすがりついて、助けを求めたりしない。

あんな、情けない話し方はしない。

胃の痛みは治まってきたが、こんどは吐き気が込み上げてきた。嘔吐を堪えた苦痛で涙が閉じた目じりに滲む。

苦しさと、そして湧き上がる、それを飲みこむほど激しい悲しみ。これは喪失の涙なのだろうかと思った瞬間、玉城の全身が震えた。

玉城がすっかり気を失っていると思ったのか、リクは何も言わず、そのまま家を出ていってしまった。

完全にリクの気配が消えるのを待ち、玉城はムクリと体を起こした。手を伸ばして携帯を掴み、立ち上がったが、足に力が入らない。

「くそ……。力いっぱい殴りやがって」

何とかテーブルに手を付き、体を支えた。

“ コッソリ後を付けよう。このままで済ませるわけにはいかない。

”

頭が混乱して錯乱して、狂いそうだった。

いったい何が起こっているのか。

これがすべてリクの仕掛けた大がかりな冗談だったら、どんなにい
いだろう。

そうだったら、さっきと同じだけあいつを殴り、そして抱きしめて
笑って許してやろう。

本気でそう思った。

「うあ・・・！」

不意に手の中の携帯のバイブが激しく震えだし、玉城は思わず声を
あげた。

携帯の表示には長谷川の名があった。

・・・長谷川さん！　なんで今、あんたがここに居ないんだよ！
なんで！！

玉城は泣き叫びそうになりながら、バイブの震えを手のひらで包み
込んだ。

第20話 璃久

『玉城、それどういうこと?』

電話の向こうで長谷川は低く唸るように言った。

玉城はリクのリビングでウロウロ歩き回りながら、たった今起こったことを長谷川に息もつかずに話したのだ。

床には先程自分とリクが割ったガラスの破片が、まだ至る所に散乱したままだ。

木材に染みこみ始めた赤い液体と強い香りが、数分前の出来事が現実だったのだと玉城に伝えてくる。

「俺にもわかりません。ただ、リクの中にリクじゃないヤツがいるんです。確かなのはそれだけです」

『憑依って事?』

「そうなのかもしれません。・・・いえ、そうであって欲しい。だって憑依なんて一時の事でしよう? だったら問題ない。あいつの霊力は、そんなに弱っちいもんじゃないですから」

『でも、あんたはそうじゃないかも知れないって不安があるんだろ?』

「・・・わからないんです」

玉城は息苦しくなつて、また部屋をグルグル歩き出した。とにかく動いていないと堪らない気持ちになってくる。

ガラスの破片のないロフト下を歩くと、目の前の納戸が少し開いていて、中のキャンバスやイーゼルがひっくり返っているのが見えた。

「あれ?」

『何?』

「ちよっと待って下さい」

玉城は気になってその扉を開けた。

リクは大ざっぱなところもあるが基本綺麗好きで、整理整頓に関しては、とても徹底していたはずだ。

それなのに、いつもきちんと並べられていたキャンバスの一部が床に散乱し、絵の具もケースから出されて散らばっている。チューブから飛び散っているものまであった。

クリーム、赤、青、黒。

そして中央に転がっているキャンバスの絵に、玉城はぞくりとした。

『どうした？ 玉城』

「奇妙な絵が……。いえ、以前にも抽象的な落書きをしたことはあったんですが、それとも違う。これはリクの描いたものとは思えません。これは、まるで……」

『まるで、何？』

「リクの背中 of 傷あとです。とても稚拙な……小学生が描いたような。それに……」

『何？』

「サインがあるんです。大きく、サインが」

玉城は全身に鳥肌を立てていた。

何か大きな引っかけが、喉元に詰まっている。

『リクのサインじゃないの？』

「リクじゃない」

『誰？』

「……璃久」

『え？』

「漢字の璃久。リクが、画家としては表に出して使わない、漢字の“璃久”です」

一瞬、海の方の相手は考え込むように黙った。

玉城はその沈黙の最中に、携帯を耳にあてたまま、リクの家を飛び出した。

「長谷川さん、俺行きます。リクのところ」

『どこか分かるの?』

「ええ。華南ロータリー近くの廃屋。知ってるでしょ? 悪ガキどもが以前溜まり場にしてて、何かの事件でニュースにもなった、松井モーターズの廃工場です」

玉城はそう伝えながら、閑散とした道を駅方面に向かって走り出していた。運よくタクシーが通りがかるのを祈りながら。

15分ほど前に出ていったリクの姿は当然もう無い。

目でタクシーを探しつつ、手では命綱を持つように長谷川に繋がった携帯を握りしめた。

「長谷川さん・・・リクは、霊に憑依されたんじゃないのかもしれない」

『うん、私もそんな気がしてきた』

ピリリと鼓膜が震えるように、長谷川の確かな声が響いてきた。

『玉城』

「はい」

『この電話、切らないからずっとあんたの耳に当てといて。出来る限り状況を伝えて。リクが、誰に、何のために会いに行ったのかが知りたいんだ』

「はい!」

『いい? 慎重に。焦って突っ走らないでよ』

「はい!」

玉城はいつも窮地を救ってくれた女神の命綱をしっかりと掴み、一方で、普段は車の交通量の極めて少ない一車線の車道に目を走らせ

た。

女神の恩恵なのだろうか。一台の空車のタクシーがこちらに向かってくる。

玉城は車道に飛び出し、めいっばい手を振ってそれを止めると、転がるように乗り込んだ。

第21話 対峙

もう20年以上放置されているその自動車整備工場は敷地内を雑草に覆われ、壁面に這うツタはグロテスクな網目を描きながら屋根へ向かって伸びている。

併設されている小さな事務所部分はすべてのガラスが故意に割られ、さらに殺伐とした有様だった。

リクは、腰の高さまでせり上がって固まっているシャッターをくぐり、薄暗い作業場に入り込んだ。

さほど広くはなく、2トントラックが2台も入ればいっぱいになりそうなスペースだ。

奥に赤く錆びたドラム缶が3つとスチールラックが放置されているくらいで、機器類もなく、ガランとしている。

勝手に入り込んだ悪ガキどもの仕業だろう。成人向け雑誌や漫画がページを開いたままうち捨てられ、モデルの女があられない姿を晒している。

油染みたコンクリートの床の隅には、使用済みの男性用避妊具が転がっている。

胸の悪くなるような、汚れた場所だ。リクは、それらを見ながらニヤリとした。

こんなにふさわしい場所は他には無いと。

待ち人はすぐに現れた。

同じようにシャッターの隙間をくぐり、小走りでリクの側まで近寄ってきた。

「岬くん、いったいどうしたっていうんだ？ あんな電話くれるか

ら、驚いてとにかく飛んで来たんだ。ねえ、・・・冗談なんだろう？人を殺したとか・・・」

荻原は不安そうに眉尻を下げ両手でリクの腕をつかんだ。

「先生」

リクは何の感情も表さず、荻原の目を見た。

「先生、僕、また記憶が飛んだんです」

「ああ。そうじゃないかと思ったんだ。昨日、私の所で雑談中に急に目つきが変わって、フラリと帰ってしまったからね。心配してたんだ。まさか・・・あのあと何かあったのか？」

「ええ」

リクは、ほんの少し口の端を上げ、笑った。

「楽しいワンマンショーを見せてもらいました。あなたが“もう一人僕”のコーヒーに入れた眠剤のせいで、ほんのさわりしか見られなかったのが残念です」

「・・・なんだって？」

荻原は一瞬表情を固め、次に下げていた眉尻をグイと上げ、リクを見た。

「可哀想に。馬鹿みたいに気の弱いもう一人の僕は、すっかり自分がやったんだと思いこんで、神経をやられちゃった。まあ、僕には手間が省けて好都合だったけど。」

ねえ荻原先生、教えてあげようか。あんたはあの夜、二人の人間を殺したんだ。あの寸詰まりの汚らしい男と、もう一人の僕」

玉城はシャッターの隙間にそつと耳を寄せたまま、いきなり飛び込んできたリクの言葉に放心した。

全く何のことなのか理解不能だし、現実味もない。それとも理解できないのは頭の回路が繋がってない自分のせいだろう

うか。

数分前。

タクシーで工場近くまで来たとき玉城は、自転車を草むらに隠すようにして倒し、この敷地内に入って行く男の姿を見たのだ。

あれがさっきの電話の相手なのか？

玉城は気付かれないようにその場でタクシーを降り、そつと男の後を追って敷地内に入った。

『玉城、どうした？』

まだ電話を繋いだままにしてくれている長谷川は、まるで玉城の心臓の音を感じているかのように、状況の変化に敏感だった。

「男が入っていきました。リクがさっき『先生』って呼んだのが彼だと思っています」

『そつと付けてみて。私はもう、喋らないようにするから』

「はい。俺ももう、話しかけませんから。でも、このまま繋いで置いてくださいね？」

『大丈夫だつて。しっかり聞いてるから』

玉城はその声に励まされるように前を向き、気付かれないようにそのシャッターの隙間に耳を寄せたのだった。

中の二人の声は、がらんとする空間に反響して驚くほどクリアに聞こえる。

中の様子も見たくなかったが、１メートルほどせり上がったシャッターの下から顔を出すわけには行かない。

なんとか、錆びて抜け落ちた鍵穴を見つけ、そこから様子を伺った。

“さっきのリクの言葉は一体なんだ。この『先生』が、二人を殺した……？　そして、もう一人の僕？”

玉城は息を潜めながら右手で携帯を握り、もう片方の手はポケットの中で触れた、四角いものを握りしめた。

秋口だというのに、玉城のこめかみから汗が滴り落ちてくる。

長谷川には、あの二人の会話が聞こえているのだろうか。状況を実況できない玉城はイライラした。

鍵穴の中で、先生と呼ばれた男はリクの両腕から手を放し、険しい顔でリクを見つめている。

「岬くん。君が何を言ってるのか分からないよ。俺をからかっているのなら、付き合いきれないからすぐに帰らせてもらおうよ」

「あれ？ わかりませんか？ ごめんなさい、説明が下手くそで。

僕もやっと目覚めたところで頭がよく働かないんです。でも、いいですよ。少しずつ説明しましょう。どこからがいいですか？ 昨日

？ それとも、なぜもう一人の僕が、荻原先生の診療所に通い始めたのか・・・って所からにしますか？」

リクはポケットからあの折り畳み式ナイフを取り出すと、軽く一振りし、飛び出した鋭い刃先を荻原に向けた。

第22話 罊

「そのナイフは？」

荻原はもはや、驚いた表情をしていなかった。ただ、忌々しそうにナイフとリクを交互に見比べている。

「ええ、死体から抜き取ってきました。混乱したもう一人の僕に命令して。だって、嫌じゃないですか。このナイフには僕の名が彫つてあるし、指紋だつて付いてる。あのまま残してきたら僕が疑われちゃうでしょう？ 何より、あなたのワナに嵌るのは真つ平だもん」リクは不満そうに口をとがらすと、ナイフを閉じたり開いたり、手の中で弄び始めた。

その姿はいたずらを咎められて言い訳をする子供のようだ。

「いい加減にしてくれないか？ 君の言ってることはさっぱり分からない。もう一人の僕とは誰だ？ 罊っていったい何の事だ。頭がイカれたのか？」

荻原は不愉快そうに再び眉間にシワを深く刻み、リクを睨みつけた。

「いつぺんに質問しないでくれるかな。まだ体と脳がしっくり来ないんだ。何しろ長いこと閉じこめられて来たからね。誰かさんのせいで。やっと出られたと思ったら、厄介事に巻き込まれててさ。大迷惑」

リクはわざとらしく肩をすくめた。

「解離性同一障害・・・か」

荻原がそう言つと、リクは返事の代わりに大きく緩慢な伸びをした。「へえ、そうなの？ 何にでも名前をつけちゃうんだね、医者つてだけどさ、今気付いたつて顔してるよ。最初から気付いてるから心療内科に誘つたんだと思つてたけど。じゃあ、やっぱり、僕がどこ

まで知ってるかを聞き出すためだったんだ。あ、それとも、見張るため？」

「お前は！」

荻原はそこで初めて声を荒げた。

「お前はいつたい、何を見たんだ！ 何を知ってるんだ！」

その声にビクリと跳ね上がったのはリクではなく、錆びたシャッターに貼り付いていた玉城だった。

そして、その頭の混乱は、ますます酷くなる。

――解離性同一障害・・・？ リクが？

荻原が犯した犯罪とはなんだ？ さっきリクが言ってた殺人なのか？

荻原がリクを見張る？ なぜ？ 二人はどういう関係なんだ！

長谷川には、このやり取りが聞こえているんだろうか。

長谷川なら、今何が起こっているのか、分かるのだろうか。――

作業場に向けてかざした携帯電話を祈るように見つめながら、玉城は身を固くし、物音を立てないようにして、ひたすら二人のやり取りに耳をすませた。

「ボクが見たこと？ それはどっちの事を言ってるのかな」

リクが小さく首を傾げると、荻原は再び声を荒げた。

「ふざけるな。俺はお前に、“人を殺したかもしれない”って言う

て呼び出されたんだ。死体を見たんだろ？ そうなんだよな？ お

前が殺したんだろ？ そのナイフで」

「待って、待って」

リクはクスクスと笑った。

「慌てないでよ、センセ。あなたも健忘症になっちゃった？ 確かにもう一人の僕は、先生に騙されて、そう思い込んだみたいだけどさ。僕は真実を知ってるよ？ あの男を殺したのは先生だ。

瞼が重かったけど、こっそり見てたもん。もう一人の僕が、ちゃんとお寝んねしてくれてたから」

荻原は奇怪なモノをみたように口をあぐりと開けていたが、その後ジワジワと血の気の引いた顔をゴムのように引きつらせ、リクを睨みつけた。

けれど、その歪んだ口からは言葉が出てこない。

「残念だったね、センス。もう一人の僕が時々記憶を無くす兆候があることを利用して、ボクに罪をなすり付けようとしたんだろうけど、失敗だったね。あいつを騙せても、ボクは無理だ。あいつの意識が遠のくと、ボクは覚醒する。普段は扉の奥に仕舞い込まれてて身動きできないんだ。あいつが不在の時だけこの体を自由にできる。今もう、嬉しくて仕方ないんだ。あの弱虫が消えちゃったから。わかる？ この気持ち」

リクは楽しそうに笑った。

「ねえねえ、教えてよ。殺されたあの男は誰？ 先生にとって、都合悪い人？」

「うるさい！」

荻原は鋭い目でリクを睨みつけた。

「そんな都合のいい二重人格がいて堪るか！ 多重人格者は記憶の交換はしない。一人の影にもう一人が閉じ込められてるなんて聞いたことが無い！ 最初から俺を騙してたのか？ そうなんだろう？ ぜんぶ分かってて、俺の診療所に来たんだろ！ くそっ」

リクはひとつ大きく溜息をついた。

「信じない人だなあ。本当に心療内科医だったの？ あいつは本当に何も知らなかったんだ。何も見てないし、何も覚えてない。何も知らずに、先生の診療所に治療に行ったんだ。行くように暗示を掛けたのはボクだよ」

「じゃあ！」

荻原は濁った赤い目をリクに向け、肩をいからせた。

「いつたい、ここにいるお前は何なんだ！」

リクはニヤリとした。

気の遠くなるほどの年月、その言葉を待っていたかのような濃厚な笑み。

「ああ、そういう訊き方が一番答えやすいよ。じゃあ、ちゃんと自己紹介するね。先生」

リクはスツと姿勢を正し、一瞬真顔になったあと、殷懃な態度で荻原に一礼した。

「改めまして。お久しぶり、荻原さん。ボクが“あの”岬璃久です。長い間、もう一人のリクの中に閉じこめられてたけど、ようやく外に出ることが出来ました。」

忘れてなんかいないですよ？15年前、貴方に背を斬られ、焼き殺されそうになった、あの時の子供です」

玉城はもう少しで喉から出そうになった声を、なんとか辛うじて押しとどめた。

第23話 許さない

「ふっ、姑息な芝居しやがって！」

荻原の怒りに満ちた言葉に、璃久は笑った。

「何度言っても分かんない人だなあ。あいつは本当に知らなかったんだってば。ただ純粹に体調が悪くて、医者に飛び込んだ。・・・まあ、ボクの暗示だけど。

ねえ、先生。びっくりした？ 15年前に殺し損ねた子供がひよっこり大人になって自分の所に受診に来たんだもんね。ボクは15年ぶりに目覚めてから、あなたを探すのは簡単だった。名前も、顔も、貴方が発する異様な靈気も、ぜんぶ分かってたから」

「名前も？」

「覚えてない？ あなたをあの現場に降ろしたバンの男が、あなたの名を呼んだのを。あれは・・・共犯者？ もしかして、今回殺されたのは、あの男だったりしてね」

相変わらず陽気な口調で喋る青年を睨んでいた荻原だったが、ある一点から急に腹に何かを決めたように片手をスラックスのポケットに引っかけ、肩の力を抜いた。

「ふーん。じゃあ、俺が治療してやってた方は、何も知らなかったっていいのか？」

「最初からそう言ってるじゃないか。先生は必死にあいつを個人的に誘って、本当に記憶が無いのかどうか、確かめようとしてたみたいだけど」

「じゃあ、時々記憶が途切れるって言ってたのはどうなんだ」

「あれも本当だよ。どういう訳か数ヶ月前にあいつが自分で『扉』を開けてね。ボクは目を覚ました。ボクが表に出ようとすると、あいつは苦しみ、意識が混濁する。あいつが苦しむのを見るのは楽し

かったな。・・・いつそ、ぶち殺してやりたいと思ったね。ボクを拘束しやがって」

璃久は眉間にシワを寄せた。

普段しない、そんなリクの表情や口調に、シャッターの影で聞いていた玉城は、どうにもやり切れず、泣きたい気持ちになった。

そして同時に、ああそうか、そうだったのだと、引っかかっていたものが喉元を流れて落ちた。

およそ理解しがたい“璃久”の告白のすべてを受け入れてみると、今までのすべてが納得できる。

「自分で自分を殺すのか？ 物騒なこつた」

荻原は次第に落ち着きを取り戻し、余裕の笑みさえ浮かべ始めた。

玉城には、それがどうにも不気味に見えた。開き直った荻原の魂胆が、その笑みに見え隠れする。

玉城の中で危険を知らせる信号が点滅を始めた。

「人を殺す方がよっぽど物騒だと思っけどな」

璃久は面白く無さそうに言った。

「ボクが記憶を無くしてて無害だと分かったら、今度は意識障害を利用して殺しの濡れ衣を着せようとするなんてね。さすがだよ。お陰でボクは弱り切ったあいつを消して、この体を使えるようになったんだけど」

「へえ。良かったじゃないか。それも一つの殺しって訳か？」

荻原が下卑た笑みを浮かべると、璃久は吐き捨てるように言った。

「一緒にするな！ 人殺し！ あんたが殺したあの男は誰だよ。昔の仲間か？」

「そんなに興味あるなら教えてやるよ。昔、金に困ってた学生時代にツルんでた仲間だ。医大に入っただけいいが親の会社が倒産。自力

で大学資金をつくろうと、学生仲間の起業話に乗り、そこで借金。借金仲間とヤバイ請負仕事に手を染めたってわけさ。一番ヤバくて金になったのはやっぱり殺しでね。

けっこうあるんだよ。ヤーさんだって手を出したからない仕事ってさ。でも、所詮素人だ。あの男は真っ先に足がついて指名手配されちまってさ。逃亡しがてら、共犯の俺を強請ってきやがった。ドジ踏んだのは自分のくせして。こっちは医師として軌道に乗りかけたってのにさあ。穏和な俺も、ついにぶち切れた・・・ってわけ」

告白だ！ 玉城は身震いした。

この男は自分が重罪を犯したことを認めた。

玉城は手の中の携帯を汗ばむ手で握り直し、そして先程ポケットから出した“もう一つのお守り”を胸の前にかざした。

15年前のリクへの暴行事件は控訴時効が成立している。

ここでリクに対する殺人未遂が発覚しても、その犯人の罪を問うことは出来ないだろう。

けれど、昨日犯したばかりの殺人となれば話は別だ。

決して喜ぶべきではないが、リクをあんな目に遭わせた男を法で裁くことができる。

リク・・・。

玉城は改めてハッとした。

そうだ。

そのリクは、今どこだ？

あんなに真実を知りたがっていたリクは、どこなんだ？

自分を殺そうとした人間が、養父母ではないと信じたがっていたあいつは。

ここで顔色一つ変えずに自分を殺そうとした男と対峙している青年

が別のリクなのだとしたら。

目の前の衝撃に束の間忘れていた“問題点”が再び波のように押し寄せ、玉城の心臓は病的に激しく鼓動をはじめた。

「へえー。そういうことね。まあ、あんたが誰を殺そうと、ボクにはあまり関係無いことだけどね」

荻原の告白を聞いた後だというのに、璃久は退屈そうに再び手の中のナイフを弄びはじめた。

玉城の位置からは、璃久の表情は少し見え辛かったが、その声で、怯えや緊張は皆無なのが分かった。

「それはそれは。じゃあ、見逃してくれるってわけか？ 坊や」

「まさか」

「自分を殺そうとした人間は、やっぱり許せないか？」

荻原は、唇を引き延ばし、緩慢に嗤った。馬鹿にしているとしか思えない、そんな笑みだ。

「そうじゃないね」

恐ろしく研ぎ澄まされた鋭利な刃物のように、璃久の言葉がスツと突き出された。

「あんたはあの時、言わなくていいことをボクに喋った。ボクを殺せと頼まれたのなら、無駄口叩かずにさっさと殺せばよかったのに」

「はあ？ 何の事だ」

荻原は少しポカンとした表情だった。本当に覚えていないらしい。

“何の事だろう”

玉城はゴクリと息を呑み、青年の見えない唇の代わりに、うなじ辺りを見つめていた。

さっきまでゆったりとしていた璃久の動きが少しぎこちなくなり、

微かに肩先が震えて見たのは気のせいだろうか。

「あんたは言ったんだよ。ナイフで斬りつけられ、痛みと恐怖で地面をのたうち回っていたボクに。これはいつたい“誰が仕組んだ”仕打ちなのかを」

「ああー」

荻原は全てを理解したのか、事も無げに笑い、さらにその遠い過去の場面をしみじみ思い出そうとするように、眼球を斜め上に動かし

「そうだった。もう、何だか笑えるほどお前が哀れでね。天使みたいな顔して、血だらけで怯えてるお前の姿見てたら、つい教えたくなったんだ。お前を殺せって言ったのは、お前を育ててるあの養父母だってね。

あの二人はお前のことを札束としか見てなかったんだよ。愛情なんて欠片もない。ほら、そんなこと何も知らずに死んでいくのは辛いだろう？ 自分を殺そうとした人間くらい、知っておきたいだろう？」

ちよつとした思いやりだよ、とでも言いたげに眉尻を下げて、荻原は嗤った。

玉城は血が凍る思いがした。

こんなに誰かを憎いと思ったことはなかった。

この荻原という男は、明らかにゲームか何かのようにその卑劣なバイトを楽しんでいたのだ。

狂っている。仮にも医療を志すもののやることとは思えない！ いや、もはや人ですらない。

ドクドクと体中の血が煮えたぎり、吹き出す出口を探しているようだった。

ここにいる璃久は、その耐え難い事実を胸にしまい込み、15年間

息を殺していたのか！

「ボクはあんたを許さない」

璃久のその声は、低く落ち着いていたが、ゾツとするほど冷たかった。

玉城が、このあと自分の取るべき行動を冷静に考える間もなく、それは突然に起こった。

さっきまで右手で弄んでいたナイフをパチリと開くと、まるで俊敏な猛獣が乗り移ったかのように璃久のその体は地面を蹴り、宙を舞った。

第24話 死闘

その攻撃が予想外だったのか、荻原は顔を引きつらせて体を反転させ、辛うじて飛びかかってきた璃久を交わすと、油染みた地面に尻餅をついた。

璃久はそれも計算していたとも言つようにナイフを逆手に持ちなおし、ヒヨウのような身軽さで、倒れ込んだ荻原に向かって行った。

体勢を立て直した荻原はいとも簡単にナイフを持つリクの手を除け、その右足が隙かさず璃久の脇腹を蹴りつける。

けれど同時に自ら後ろへ体を反らした璃久は、その力を借りてクルリとダメージなく地面で転がると、再び俊敏な獣と化し、荻原めがけて飛びついた。

トンと荻原の胸の上に左手をつき、璃久は握りしめたナイフを頭上に振りかざした。

そのナイフがまさに振り下ろされようとした瞬間、玉城の叫び声とその空間に響き渡った。

「リク！ やめろ！」

思いがけない玉城の声に、ビクリと体を跳ね上がらせ、璃久は一瞬動きを止めた。

璃久の下で爆破寸前まで怒りを溜め込んでいた男が、そのチャンスを逃すはずはない。

荻原は満身の力を込めて、無防備に晒した璃久の細い首を側面から殴りつけた。

声もなく璃久の体は地面にたたき落とされ、素早く起きあがった荻原は、仰向の青年の体に馬乗りになった。

急所とも言える首を荻原の怪力で殴られた璃久は、苦痛に声も出せず意識も朦朧としていたが、荻原はさらに抵抗できないように左手と膝で璃久の両手を押さえ込み、その頬を拳で2度、力一杯殴りつけた。

「やめろ！」

喉が張り裂けそうなほど声を振り絞り、再び叫びながら玉城は走り寄った。

けれど既にナイフを奪い、それをリクの首筋にピタリと当てている荻原に、それ以上近づくことなど出来ない。

玉城は、二人の5メートル手前で無様に立ちつくすしかなかった。

俺がああのタイミングで叫んだせいだ！

玉城の心臓が鉄の弾をぶち込まれたように痛み、震えた。

「お前、誰だ！」

荻原は血走った目を玉城に向けた。

璃久の名を叫んだ時点で既に、玉城は荻原の中で敵と認識されたらしい。

「やめろ。リクを放せ！」

「は？ あんた見てたんだろ？ 最初にナイフ振りかざして俺を殺そうと飛びかかってきたのはこいつだぞ？ ここで殴り殺したって正当防衛だ」

荻原は肩で息をし、興奮で言葉尻を震わせていた。これ以上刺激するのはまずい。

荻原の下でぐったりと目を閉じて動かない璃久を見ながら、玉城は自分の高ぶりを何とか押さえ、ゆっくりと呼吸した。

「もうリクは動けないじゃないか。反撃する力もないし、ナイフは

あんたが持つてる。それ以上そいつを傷つけたら、正当防衛にはならないよ。これ以上罪を大きくしたくないだろ？」

「これ以上って、何だよ」

鋭い奥二重の目が、玉城を睨みつけた。

二人に増えた邪魔者を、どうやって速やかに処理しようかと考えているケダモノの目だ。

こんな人間が医師だと？ 人はどこまで堕ちられるんだ。

玉城は別の意味で体が震えた。

「たのむ、・・・リクを放してくれ。そしたら、今聞いたことは全部忘れる。誰にも話さないし、リクにも、口止めする」

多分荻原は信じないだろうと思って言った言葉だったが、玉城はそれで本当に璃久が助かるならばそうしてもいいと思った。法とか正義とか、もうどうだってよかった。

荻原の重量感のある体の下で、押さえつけられた璃久の指先が痙攣するように時たまピクリと動く。

顔は向こうを向いているが、殴られた首筋は赤黒く内出血し、それ以外は紙のように蒼白だった。

「信用すると思うか、馬鹿が。俺はこいつを始末して、あの死体を片づけてくる。それで万事OKさ」

「OKなもんか！ 俺がいる。さっきの会話はぜんぶ聞いたし、録音だっとしてある」

玉城は、ほんの少し膨らんだジャケットのポケットを、上からポンと叩いて見せた。

予定変更だ。

玉城がそう息巻くと、理性と正常な判断を失った荻原は奇妙な笑みを浮かべた。

「お前も殺すさ。一番最初に」

荻原は仕事が増えたことを面倒くさがるように、リクの体から腰を

持ち上げ、玉城捕獲の体勢に入ろうとした。

けれど、その瞬間を待っていたかのように、荻原の下で璃久が大きく体を捻った。

その弾みで、まだ突きつけられていたナイフの刃が璃久の首筋にスツと入ったが、少しもひるむ事なく唯一自由だった左手を握りしめ、荻原の顎を殴りつけた。

およそ普段の“リク”の動きではない。

加えて一瞬のけ反った荻原に蹴りを入れようとした璃久だったが、その足をがっしりとした腕で遮られ、軽々と反転させられて再び地面に体を叩きつけられた。

それでも全く諦める様子はなく、抵抗を続ける璃久。

刺し違えても目的を貫こうとする、ある意味常軌を逸した執念を思わせた。

「くそっ！」

玉城は弾けるように地面を蹴って、璃久に注意を向けている荻原に突進した。

体当たりしてさらにナイフが璃久を傷つけることになりはしないか不安ではあったが、この瞬間しかなかった。

しかし、それを目の端で捉えた荻原の怒号が響く。

「来るな！」

その声と共に荻原のナイフが、コンクリートの床に伏せられていた璃久の右手の甲に、容赦なく振り下ろされた。

第25話 祈り

肉を貫き、コンクリートにナイフの刃先がガツンと衝突する鈍い音と共に、荻原に押さえつけられていたリクの体がビクリと激しく跳ね上がった。

悲痛な叫び声がその青年の口から漏れると、それが心臓を凍りつかせ、もう玉城は体の神経と思考が萎縮して身動きが取れなくなった。荻原はリクの右手の甲から素早くナイフを引き抜くと、やっと抵抗をやめたリクの頭を左手で押さえつけ、再びその首にナイフを突きつけた。

さっきの抵抗で傷ついてしまった首筋はすでに真っ赤に染まっている。

貫かれた右手は、動くことも叶わないリクの体の横に力なく伏せられた。

脅しではない。本気なのだ。

ほんの30秒ほどの荻原の凶行は、嫌と言うほど玉城にそのことを思い知らせた。

この男は、狂っている。

「おい！ さっき会話を録音したって言ったな。そいつをこっちに持ってこい。投げずにお前が持ってこい。逃げやがったらこいつの首を斬り落とすぞ！ いいのか！」

いったい、録音データを奪ったからと言って、何になるというのだ。玉城は絶望的な気持ちでそんなことを思った。そうやっておびき寄せて、俺を先ず殺すのか。

俺がリクを見捨てて逃げるといふ頭は、この男にはないのか。

自分は思いやりの欠片もない鬼畜だというのに。

玉城は不意に滑稽になった。

完全に冷静な判断が出来なくなったこの男の考えの方が、今、一番当を得ている。

・・・俺はリクを置いてなんて、逃げられない。

そこに血だらけで倒れている青年の中に、もう、あの、俺の知っているリクが居ないのだとしても。

その体を置いて、逃げる事なんて出来ない・・・。

玉城はポケットから携帯を取り出すと、ゆっくりゆっくり荻原に近づいた。

長谷川との通話はとくに切れていた。

腕力にはまるで自身がない。

喧嘩など、したこともない。

中学の時に柔道の授業があったが、いつもふざけて何も学ばなかった。

長谷川さんは、強かったな。無敵だった。ふと、そんな事が頭を過ぎる。

ここにるのが彼女なら、リクを救えたのかも知れない。俺じゃなく、彼女だったら・・・。

あと3メートル。

残されたのは、ただその距離だけだ。

「早く持つてこい！」

ジリジリして荻原が叫んだ。

「ああ・・・行くよ・・・行くから」

永遠の3メートルだったらしいのに。

ここで時間が止まってしまえばいいのに。

玉城は目まいを起こしそうになりながら、ゆっくりと進んだ。

見たくないのに、うつ伏せに押さえつけられ、もう動かないリクの体に行ってしまう。

苦しいだろうな。リク。そんなことを思った瞬間、不甲斐ない自分への怒りが空しく込み上げてきた。

あと2メートル。

荻原が腕を伸ばし、悔し涙で玉城の視界が霞んだ。

その時。

ピンと張りつめた静寂を、何かが微かに揺るがした。

玉城は一瞬体を硬直させた。

荻原も体にグツと力を入れたのが分かった。首をのびし、耳をそばだてている。

気のせいではない。あれはパトカーのサイレンの音だ。

きっと偶然なのだろう。けれど、その偶然に賭けるしかない。

「お前！」

鬼の形相を向けて来た荻原に、玉城は冷静な声で返した。

「悪いね、さっきこの携帯で呼んだんだ。もうあきらめたほうがいいよ。時間の問題だから」

荻原は急に体を起こし立ち上がると、玉城のほうを睨みつけながらにじり寄ってきた。

その目はさらにヌラヌラと異様に光り、血走っている。

なにも思考がまとまらず、ただ怒りに錯乱した目だ。

「ほら、やるよ。お望みのもの。録音したのが欲しかったんだろ？」

それ持つてサッサと逃げろよ。今なら逃げられる」

玉城が荻原の感情の矛先を変えるために、苦肉の策として握っていた携帯を投げつけると、荻原は血走った目で玉城をひとにらみしたあと身を翻し、脱兎の如く走り出した。

少しずつ音量を増すパトカーの音が焦燥感を煽ったのだろう。

荻原は必死に玉城の携帯を握りしめたまま、シャッターの隙間から外に飛び出し、見えなくなった。

玉城は喉を震わせてやっとなつ大きく呼吸すると、うつぶせに倒れたままのリクに走り寄った。

首筋よりも、手からの出血が酷い。

ナイフは完全に手の甲から掌に突き抜けていた。まだ溢れ続ける血にまみれ、断裂された骨らしきものまで見えている。

少しの血にも目眩を起こしてしまう玉城だったが、吐き気を堪えながら先ず自分のジャケットを脱ぎすて、更にＴシャツを脱ぐと、ラニング一枚になりながらリクを抱き起こした。

倒れないようにしっかりと支えた上で、まだ血の止まらないその右手にしっかりとＴシャツを巻き付け、止血のために両手でぐっと握りしめた。

目を閉じたままのリクが痛みに体を固くし、小さく声を漏らした。体中の血が抜けたようにその肌は白く、唇にも色が無い。

「大丈夫だから・・・」

喉が詰まって、その後の言葉が続かなかった。

たった今、その目で見たことすべてに現実味が無く、耳にしたすべてが信じられなかった。

まず命が助かったことへの安堵が体中をめぐり、この青年を死なせずにすんだ安堵がそれを上回って脳に沁み渡った。

そして、その次に浮かび上がったのは、疼き。

“この青年は、自分の知っている、あのリクではないのだ。”

自分が抱き留めている青年の凶暴かつ無鉄砲な性格が、あまりにも自分の知っているリクとかけ離れていることに恐ろしくなり、けれどもその体は紛れもなくリクのものだと思うと、とてつもない喪失感が押し寄せ、そこまでで思考が停止する。

考えるだけで胃が痛くなり、知ることが恐ろしくなる。

山ほどもある質問を浴びせる代わりに、玉城はただ、リクの右手を心臓より高い位置に持ち上げてやり、グッと強く握って止血することに専念した。

パトカーの音がさつきより近くなった気がする。

きっとこの前の道を通るのだ。走って飛び出せば、止められるだろうか。

一瞬、リクの体を放して立ちあがろうとした玉城だったが、かなりのスピードを出しているパトカーに、間に合うわけがない気がした。再びリクの体を抱え込み、今更ながら携帯を手放したことを後悔した。

何とかしたい。

あの男を捕まえて欲しい。

そしてリクを急いで病院に連れて行かなければ。

この手はちゃんと元通りに動くだろうか。

また美しい、あの繊細な絵を描いてくれるだろうか。

『じゃあ、弔いの酒にしよう。お葬式しようよ』

もう一人の璃久の声が頭に響き、刹那、体にぽっかりと開いた穴に冷たい風がゴウと流れ込んだ。

・・・リクに会いたい・・・。

今は大人しく、ぐったりと玉城に身を預けている見知らぬ青年の血だらけの手を、玉城はただ両手で強く握りしめた。

それはまるで何か、祈りの形に似ていた。

第26話 守りたい

パトカーのサイレンが更に近づいたような気がした。

玉城は注意深く耳をすました。速度を緩めたのが分かる。まさか、本当にここに来るのか？

「パトカー・・・来るね」

不意に腕の中のリクが小さく呟いた。聞き逃しそうに小さくかすれた声。

目は閉じたままだ。

「え？・・・ああ」

「玉ちゃんが呼んだ？」

「いや、俺じゃない。俺にそんな余裕は・・・」

突然玉城の頭にひと筋の光が通り抜けた。

確信めいた、希望と歓喜の矢だ。

「リク？ お前、リクなのか？」

玉城はグイとその肩をつかみ、青年の顔を覗き込んだ。

リクが重そうに瞼を開け、ガラス細工のような琥珀色の瞳で玉城を見た。

「・・・。何て答えたらいいのかな」

そう言っただけは微かに笑った。

それはとても弱々しいが、棘のない柔らかなものだった。

玉城の中の、半信半疑と不安の霞が消えてゆく。

「俺の知ってるリクなのか？ 凶暴な、さっきまでナイフを握ってたもう一人のリクじゃ無いんだよね？」

「・・・」

「なあ！」

「玉ちゃん・・・ごめん。頭がボーツとしてるんだ。クラクラして・・・。」

やっと僕の中で、いろんな事が繋がり掛けてきた・・・でも、まだ、思い出せないことがいっぱいあって・・・。」

けれど、リクが言い終わる前に玉城はリクを力一杯抱きしめていた。そうしていないと、またその体の中から大切なものが抜け出してしまいそうな気がした。

リクは驚いて一瞬目を見開いたが、本当にもう何かを考えたり抵抗する気力も無いらしく、玉城の腕の中で力を抜いた。

そのうちサイレンは更に近づき、二人の居る空間を満たし、反響した。

パトカーはやはりこの場所を目指していたのだ。

工場の前でピタリと音は止まり、静寂の中をバタバタとこちらに走ってくる足音があつた。

シャッターの隙間から様子を伺うように顔を覗かせた二つのシルエットは、逆光だったが紛れもなく警察官だ。

「大丈夫ですか！？　すぐに来てくれと通報があつたんですが！」

“通報？”

玉城はハッとして目を斜め下に走らせた。

一瞬のうちにすべてが理解できたのだ。

ああ、そうか！　そうなんだ！

玉城は大声で叫んだ。

「怪我人がいるんです。救急車を！　犯人はたつた今そこから右方向に逃げていきました。ナイフを持った、カーキのジャケットの中年男です！」

「あなたの名前を確認させてもらってもいいですか」

「たまき。玉城です！」

警官二人は「分かりました、そこにいて下さい」と叫ぶと、すぐさま男を追って走り出した。

状況を見て玉城の言葉に嘘がないことを察知してくれたのだろうか。いや、すでに、通報である程度の状況が伝わっていたのだろう。だからこそ警官は玉城の名を確認したのだ。

「くそっ！・・・やられた！」

玉城は心底悔しそうに、しかし、半分笑いながら叫んだ。

「・・・なんで？」

リクが驚いたように、半笑いの玉城を見上げる。

「長谷川さんだよ。あの人は海の向こうに居たって、お前を守っちゃうんだ」

「長谷川さん・・・」

リクはぼんやり呟くと、懐かしいものを思い出すように玉城の腕の中で笑った。

「長谷川さん、怒るぞー！。俺もお前も、携帯なくしちゃったから」

「そうだね」

「連絡取れないと、とにかく機嫌悪いんだ。あの人」

「うん」

「めちゃくちゃ心配してたから。リクのこと」

「・・・うん」

「でも、もうお前、大丈夫なんだよな？」

「・・・」

リクが玉城の目を見た。

玉城の質問の意味は充分理解した上で、思いあぐねている。

けれども、一つ一つ表現を選びながら、リクは一生懸命言葉にした。

「まだわからない。今、僕も頭が混乱してて。ショックも大きくて。」

・・・でも、自分の中にもう一つ、人格がいることは分かった。・・・いや、思い出した。今まで閉じこめてたんだ。僕自身が。だから、これからも閉じこめる。・・・大丈夫だと思う」

リクはそれだけ言うのが必死なようで、再び目を閉じ、俯いた。

「いいよ。またゆっくり話そう。今は休め。もう少ししたら救急車も来るし。あの男もきつと捕まる」

「僕は酷いヤツなんだ。きつと、だから・・・もう一人の僕が生まれた」

「うん。もういい。また今度聞くから」

右手でリクの柔らかな髪をクシュツと撫でると、リクは力を抜き、玉城に体を預けてきた。

玉城はその体を、壊れものを扱うように両腕で慎重に支えた。

けれど、そのうちリクはゆっくりと背を丸め、首を垂れ、動きを止めた。

呼吸音も感じられない。

不安になった玉城が覗き込むと、青白い瞼は閉じられていた。

「リク？ リク？」

「・・・うん」

「びっくりしたっ！！」

思わず声を出し、そして安堵のため息を漏らす玉城。

この青年といると、きっと自分は心臓に負荷がかかりすぎて早死にするな。そう思った。

リクは再び俯き、静かな規則正しい寝息を立て始めた。

手は痛まないのか不思議に思ったが、きつとそれよりも更に強烈な睡魔なのだろう。

自分の中の見えない影に怯えて、ずっとぐっすり眠ってなかったのだ。

玉城にはその「もう一人のリク」が一体何だったのか、まだ本当に理解しきれてはいなかったが、リクには概ね、その見当がついたのだろう。

暫くして、はるか彼方から救急車のサイレンが聞こえ始めた。そして助っ人らしい別のパトカーのサイレンも前後して響く。

心底ホツとし、「よかったな」と玉城は小声でリクに呟いた。

静かな寝息を聞いていると、もう少しだけ、このままここで青年を寝かせてやりたい気分にもなってくる。

そんな自分を妙だと思いつながら、玉城は少し下にずり落ちてきたリクの右手を、

再び注意深く胸の上で握りしめた。

第27話 溶けだした記憶

荻原の身柄はその日のうちに確保され、荻原に殺された例の男、熊田の死体も程なく発覚した。

医大在学中、父親の会社が倒産。

かろうじて学業は続けられたものの、贅沢三昧に育った荻原に、食費さえ事欠く貧しい生活は耐えられなかった。

腐りついでに、つい手を出してしまったギャンブルで更に窮地に追い込まれた荻原は、忌むべき犯罪に手を染めたのだった。

指定暴力団の構成員であった熊田から仲介される形で、違法ドラッグの売り買いや恐喝、更には依頼殺人にまで手を出した。

けれどそれらは実のところ、しみつたれた貧乏生活や成績不振に辟易していた荻原の、鬱憤のはけ口にもなっていた。

どこかで、人間としての健全な精神が欠落していたのに、本人も周りも気付かなかった。

岬璃久の事件は目撃証言も曖昧で、荻原に足がつくことは無かったが、その後の依頼殺人で証拠を残し、共謀した前科者の熊田のみが指名手配されることとなった。

熊田は地方に身を潜めながら荻原を脅し、逃走資金を荻原に延々無心し続けた。

しかし、元々切れやすい忍耐の緒の持ち主であった荻原は、記憶障害のリクに罪をかぶせるという、短絡で卑劣な作戦で、ついに今回の凶行に及んだのだった。

「リクの事件も、あいつが学生の時に請け負った仕事だったんだな」
当然警察に呼び出され、いろいろ調書を取られる傍ら、事件のあらましを把握した玉城が、署内の控え室でリクに呟いた。

「そうだね。僕の養父母に頼まれて」

事も無げにサラリと話すリクに、玉城は掛ける言葉もなかった。

リクの一番知りたかった真実は、リクの中に閉じこめられた、もう一人のリクが握っていたのだ。

「15年前ね・・・」

催促もしないのに、リクは語り始めた。

「逃げ出す前に荻原は言っただ。誰かに俺のことを話したら、必ずもう一度殺しに来る、って」

「それで怖くなって記憶を閉ざしたのか？ もう一つの人格と一緒に」

玉城がそう訊くと、リクは首を横に振った。

「怖かったのはその言葉じゃない。10歳の僕の中に生まれた、有り得ないほどの憎しみと、殺意なんだ。・・・玉ちゃん、人を殺したいと思ったことある？」

冷たい控え室の壁を背にし、パイプ椅子に座ったリクが、抑揚のない声で訊いてきた。

今度は玉城が首を横に振った。

「あの時、どうしようもないほど怒りと悲しみが沸き上がってきてね。養父母も荻原も、自分を疎ましく思うすべての人間を殺してやりたいと思った。その感情で、気が狂いそうだった。その感情が怖くてどうしようもなくて。だから・・・」

リクは一つ息を吸った。

「だから、痛みで気を失う前に、僕はいつも霊達を遮断するのと同じように、その狂い始めた自分を閉じこめたんだ」

「霊と同じように？」

リクは頷いた。

「封印した。凶暴な魂を切り離して、僕とは別の、扉の向こうに追いやって閉じこめた。長い間かけて、霊から身を守るために僕が拾

得した保身術だ」

「扉に・・・閉じこめたって。じゃあ・・・」

リクは玉城をじっと見て一つ瞬きを試みせた。

「あのとき・・・美希の魂を自分の体に取り込むとき、すべての扉を開放したんだと思う」

玉城は啞然としてリクを見た。

何と言っているかわからなかった。

まるで想像できない。

夢物語か空想の話の話を聞いているようでもあったが、それがリクのいる世界の事実なんだと言うことは痛いほどわかる。

リクの中では一体、何が起こっていたんだろう。

想像すら出来ないことが一番歯痒かった。

一つだけ、単純で明瞭な疑問が湧いたが、ちょうど入ってきた警官に遮られた。

「岬さんには、引き続き奥の部屋で話を聞かせてもらいます」

30歳前後の馬のように長い顔の警官がリクを見ながら無表情に言い、そして今度は玉城を見て少し笑顔を見せた。

「玉城さんの提出して下さったボイスレコーダーのお陰で、取り調べがとてもスムーズに行っていますよ。あれを聞かせるまで、荻原は貝のように口を開きませんでしたからね。こちらが裏を取るのにも、大変役立ちます」

本来、ああ言う録音は証拠としては採用されないのだが、あまりに明瞭な録音のため、荻原を観念させる効果は絶大だったらしい。

玉城が録音に使ったのは、荻原に投げつけた携帯では無かった。ちょうど前の日に取材で使い、ポケットに入れっぱなしだった高性能ボイスレコーダーだったのだ。

もちろん、リクが凶器を死体から抜き取った云々も録音されていた

が、すべて警察に提出して欲しいとリクのほうから言い出した。自分の解離性同一障害や、15年前の事件もひっくり返してしまわないと、きっとこの事件は説明が付かないのだと。

別室に連れて行かれる前に、リクは嬉しそうな表情を玉城に向けた。警官が教えてくれた“玉城の手柄”が嬉しかったのだろう。

首から三角巾でつられた右手は痛々しかったが、随分顔色は戻ってきたようだ。

「俺も、少しはリクの役に立ったかな」

玉城がそう言うと、リクは「うん。めずらしくね」と、憎まれ口を叩いた。

そのあとの笑顔に陰りは無く、玉城はホッとした。

けれど。

さっき頭をよぎった疑問。

もう一人のあの「璃久」は、いったい今、どこに潜んでいるのか。それを訊く勇気が、玉城には無かった。

最終話 大切な宝物

「たぶん電話じゃなくて、目の前でリクの怪我のこと長谷川さんに報告してたら俺、絶対殴られてたと思うよ。・・・マジで怖かった」あれから10日が経ち、久しぶりにリクの家を訪れた玉城が震えながそう言くと、リクは「まさか」と、屈託なく笑った。それぞれが別々に後処理に追われていたため、二人がこうやって会うのも久しぶりだった。

「田舎のお父さんが危篤って大嘘ついて帰国だってさ、長谷川さん。さっき羽田に着いたって連絡あったから、1時間後には、このドアを蹴破って飛び込んで来るよ。確実に。今だってきつと、タクシーの中で足踏みしてる」

今度は、穏やかな笑顔で玉城は言った。

15年前のリクの受難、そして診察をしてくれた精神科医の診断書を合わせて考察した結果、今回の事件でリクが罪に問われることは免れた。

証人として法廷に立つという約束はさせられてしまったが。

当然、解離性同一障害のことも公に晒される。

こういった諸々の事情も合わせて、玉城は出来るだけ詳しく長谷川に電話で話したつもりだったが、どうやらその下手な説明が長谷川をイライラさせたらしい。

重要な合同会議の前であるにもかかわらず、突然長谷川は帰国すると言い出した。

「長谷川さんが嘘ついて仕事を抜け出すなんて、考えられないけど」玉城にコーヒーを煎れながら、リクはキッチンから訝しげに言った。「信じられないか？ そうかな。俺は長谷川さんらしいと思うよ」

玉城はソファに沈み込みながら、相変わらずきちんと片づいたリビングをぐるりと見渡した。

あの日割れて散らばったグラスはもちろん、ワインの赤いシミも、きれいに無くなっている。

リクは、いったいどんな気持ちでそれらを片づけたのか。

「熱いから、気をつけて」

テーブルから離れたソファに座る玉城に、リクが左手でマグカップのコーヒーを差し出した。

柔らかく芳醇な香りが、ふわりと玉城を包み込んだ。

カップを受け取りながら目を滑らせると、まだしっかりと包帯が巻かれているリクの右手が視界に入ってくる。

病院に搬送されたあの日、3時間にも及ぶ細密な右手の手術が行われた。

手術後、玉城が病室に飛び込むと、リクは玉城を見て嬉しそうに笑った。

まだ当分医者通いが続くのだと、ウンザリしたように言った第一声が何とも暢気な響きがして、玉城は笑ってしまった。
たぶんそれはリクなりの、精一杯の気遣いだったのだ。

「手、まだ痛むのか？」

リクを見上げて言った玉城に、「大丈夫、動かさなければ」と、リクは笑みをうかべた。

「医者には元にもどるって言ってたのか？ 握力とか・・・」

リクは玉城のすぐ前に木製の椅子を引き寄せて座り、玉城を見た。

「筋肉を動かす神経と筋が一度完全に断裂されたから、元通りとは行かないかもしれないって。リハビリは頑張るけど」

「・・・そう」

“絵はまた描けるのか？” その質問が、怖くてできなかった。自分があの時、荻原を刺激したせいかもしれない。その事がずっと玉城の中にあつた。あの場面が何度も夢に出てきて、ここ数日ずっと玉城を苦しめている。

リクの手には視線を向けず、玉城はぼんやりと自分の手の中で揺れる液体を見つめていた。

突然リクは何かを思いついたらしく、納戸の方へ走っていくと、奥からF5のスケッチブックと木炭を持ってきて、再び椅子に座った。「玉ちゃん、ちょっとじっとしてて」

「は？ なんで？」

けれど、自分を見つめてくるリクの目に射抜かれて玉城はソファの中で身を固くした。

少しぎこちなく包帯の右手で支えたスケッチブックの紙面で、サラサラとリクの左手が動く。

「え？ リク、左手でも描けるのか？」

玉城はにわかに嬉しくなつて弾んだ声をだした。

「さあ、どうなんだろ。初めて描くけど」

「・・・なんだ・・・そうか」

「そんな萎んだ顔すると、そのままブ男に描くよ？」

「誰も描いてくれなんて頼んでねーよ、こんな顔」

玉城がムスツとしてワザと変な顔を作ると、リクは声を出して笑った。

リクの、吸い込まれるように綺麗な琥珀色の瞳が、緩やかに白い紙と玉城の顔を往復する。

窓からの柔らかい木漏れ日と、コーヒーの香ばしい香りだけがその空間を満たしていた。

風もなく、小鳥の声もなく、胸を熱くさせるほどの静寂だ。

10日前に起きた事件も、15年前に起きた事件も、すべて夢であつてくれたらいいのにと、玉城は思った。

1年前にこの青年と出会い、いろんな事があつた。

この青年に出会わなかったら自分は、もしかしたらまだ人間不信のまま、借金を膨らませてウダウダしていたのかもしれない。とても大切な出会いだったのだと思う。自分にとって。

けれど、この青年にとって、自分は災いだったのではないだろうか。

「玉ちゃん」

スケッチブックの上に目を置き、左手を動かしながらリクが小さく言つた。

「ん？」

「ごめんね」

「・・・なにが？」

「きつと僕、酷いことしたんだ。玉ちゃんに」

「はあ？」

玉城はつい間の抜けた声を出したが、胸は小さく疼いていた。

リクが何の事を言っているのか、分かつている。その体が璃久だった、あの数時間だ。

「僕の中にはまだ、あのもう一人の僕がいる。激しくて凶暴な感情を持った僕が。今は荻原の事があつて、シヨックで少し大人しくしてるけど、キレやすくて衝動的な僕はきつとまた表に出てくる。僕の一部と融合して、息を潜めてる。もしかしたら・・・、本当は、そっちが僕の本質なのかもしれない」

リクは手を止め、スケッチブックの上に目を伏せた。

長い睫毛が、不安そうに心音と共に震える。

玉城はため息をついた。

「だから、何？」

「・・・だから」

「だから自分か怖いのか？」

リクが目を上げ、驚いたように玉城を見た。

玉城はおかしそうに笑った。

「俺は全然怖くないけどなあ。上等じゃないか。やられたらやり返す。自分を守るために牙を剥き反撃する。どこがおかしい？ また何度でもそんなリクを見たいね。すぐにどこかに飛び去る小鳥じゃなくて、生命力に溢れた猛禽類のリクを」

玉城は口先でなく、本心からそう思った。

最初こそ恐れてはいたものの、次第に理解できるようになってきた。あれは、もう一人のリクじゃない。本来のリクから抜け出した、リクの心の一部なのだ。

あの、鷹の目を持つ青年も、真正銘リクなのだ。

もちろん、リクの思っているような危険因子ではない。

弱い部分を補い、生きていくために、生まれるべくして生まれた「強さ」なのだ。

ただ、あの幼いころの経験が奇異過ぎて、少しばかり粹をはみ出したのかもしれない。

けれど、結果的にその強い部分が犠牲となって悲痛な事実を内包し、繊細なリクを守ってきたのだ。

それにしても・・・。

そう言ってしまった自分がどうにも照れくさく、体が火照り、仕方なく玉城はソファから立ち上がった。

「あっちのリクは酒もいけそうだしな。お前、ちつとも飲まないから酒の席ではあっちを呼び出すよ。焼き餅やくなよ」

リクがずっと驚いたような顔で見つめてくるので、体の火照りはますます止まらず、照れ隠しにリクの膝に乗っているスケッチブック

を覗いてみた。
そこには玉城がいた。

木炭だけを使ったとは思えない、色彩さえ感じられる濃淡の中に、柔らかな目でまっすぐこちらを見ている玉城がいた。
息を呑んだ。

そこに居るのは、リクの目と、心を通し再現された玉城だった。
実物よりも優しげで、賢そうで、ほんの少し男前だ。
これを、この青年は初めて使う左手の指先だけで描き上げたのか。

「左手とか、握力とか・・・そんなの関係ないんだな。リクには。
・・・何て言うか・・・安心した。びっくりだ」
そう言うのがやっとだった。

自分でも不思議なのだが、心臓が止まりそうだった。

「玉ちゃん」

「リク、この絵、貰ってもいいかな。いいよな？」

「玉ちゃん」

「・・・え？」

「ありがとう」

全身から汗が噴き出すのを感じながら、玉城は何とも奇妙な仏頂面
をしてみせた。

「何がだよ」

もうこれ以上、汗の出るような事を言わないでくれと、心で祈りな
がらそう言った。

その時同時にドアホンが鳴らなければ、立ちくらみを起こしていた
かも知れない。

それほど、自分に説明の付かない“気恥ずかしさ”だった。

「ほら、リク。お前が本当に礼を言わなきゃいけない『女神』のご帰還だ。でも開けた瞬間殴られないように注意しろよ?」

そう玉城が言うと、リクは可笑しそうに笑った。

艶やかな亜麻色のふわりとした髪を揺らし、リクが玄関に向かう。その後ろ姿を見ながら玉城は思った。

冗談ぬきで、いったい女神はドアを開けるなりどうするんだろう。

日々胸を痛めながら心配し続けた青年を前にして、怒鳴るのか。微笑むのか。抱きしめるのか。

リク。

お前はそろそろ気付いたらいい。

自分がどれだけ愛されてるのか。

彼女や、・・・そして、俺を含めた周りの人間から。

玉城は、自分が描かれたスケッチブックをパタリと閉じ、しっかりと抱えた。

この日もうつひとつ、宝物が増えた。

(END)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4427v/>

この胸で眠れ（RIKU・6）

2011年10月23日11時13分発行